

第99图 西原遺跡第10号住居跡出土遺物実測図(2)

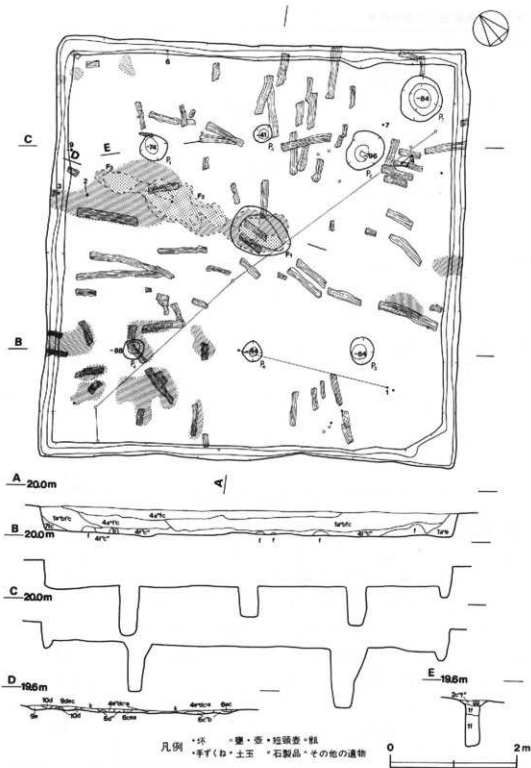
まれている。炉床には2か所赤色に硬く焼けたところがある。炉1には焼土が堆積していたが、焼けた底面が凸凹であるので、炉は長い間の使用により掘りくぼめられていったものと考えられる。炉2は、長さ140cm・短径65cmの範囲が赤色に硬く焼けており、床面を掘りくぼめないで炉床としたものである。炉3は、床面が長さ55cm・短径35cmの楕円形に赤色に硬く焼けており、炉2同様床面を掘りくぼめないで炉床としたものである。

ピットは7か所検出され、P1・P2・P3・P4が規模や配置から支柱穴、P5・P6が補助柱穴、P7が貯蔵穴と思われる。支柱穴の規模はP1が長さ43cm・短径40cm・深さ74cm、P2が長さ65cm・短径48cm・深さ96cm、P3が長さ42cm・短径36cm・深さ64cm、P4が長さ31cm・短径30cm・深さ80cmで、底面が直径20cmの円形で平坦になっている。P1の覆土は3層で1層が褐色土で焼土粒子と炭化物を特に多く含んでいる。また、この層の中に直径10cmほどの炭化材が検出された。2・3層は褐色土で、3層の方が黒っぽく軟らかである。支柱穴はほぼ床面の対角線上に位置し、軸間の長さは、長軸が3.3m、短軸が3.2mである。補助柱穴のP5・P6はそれぞれP1とP2、P3とP4のほぼ中間に位置し、支柱穴や貯蔵穴を調査後の床面を再精査している時に検出されたもので、支柱穴より小規模である。規模はP5が長さ30cm、短径25cm、深さ41cm、P6が長さ30cm、短径28cm、深さ44cmである。

貯蔵穴は東コーナ一部に位置し、平面形は開口部が、長さ72cm・短径66cmの円形、底面が長さ30cm・短径25cmの楕円形を呈し、深さは84cmである。貯蔵穴の覆土は、中位に焼土と炭化物の径30cmほどの大ブロックを含む、単一層である。

本跡の覆土は、黒褐色土を主体とする3層で一部床面まで攪乱されているが、自然堆積の様相を示している。下層は7～10cmの厚みがあって、焼土粒子および炭化物が特に多く含まれている。床面には直径10cmほどの炭化材が放射状に横たわっており、長いものでは1.4mにも達する。炭化材はもろくなっていたが、表面観察によると角材ではなく丸太のように思われた。焼土域が壁ぎわを中心に13か所検出され、炉の上に検出された焼土域は、壁から2mほど床面中央方向へ伸びている。この焼土域内の炉3と壁の中間部にクルミ・クヌギなどの木の実の炭化物がかたまっている。覆土や炭化材、焼土域の状況から本跡は火災に遭ったものと思われる。P3と南西壁との間の床面に20cm×13cm×12cmのふい黄橙色の粘土塊、また、貯蔵穴の北東側と南側の床面にも粘土塊が出土している。

出土遺物は土師器および土師器片156点、土製品1点である。土師器の器種は、袋形土器・短頸壺形土器・環形土器・手捏ね土器である。遺物は4か所のコーナ一部を中心に出土し、炉3と北西壁の間の床面からはほぼ完形の環形土器2点と短頸壺形土器1点が出上している。東コーナ一部の貯蔵穴の周囲から出土した多数の遺物は炭化材の上など覆土中から出土している。袋形土器は大部分がこの地点から出土しているが、西コーナ一部の床面出土の上器片と接合している。



第100図 西原遺跡第11号住居跡実測図

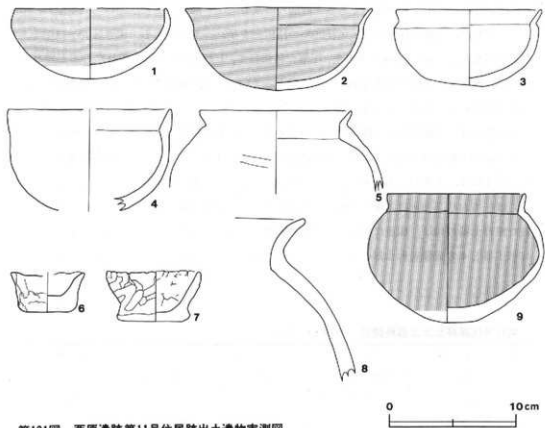
第11号住居跡出土土器解説表 (第101図)

番号	器種	法量(cm)	器影の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
1	坏形土器 土師器	A 12.0 B 5.6	体部は内斡しながら立ち上がり、口縁部は直く、やや内傾する。器厚は底部が厚く、口縁に向かって薄くなっている。	口縁部内外面横位のヘラナデ、体部外面へラ削り、内面放射状にヘラミガキ。	褐色、スコリア 明赤褐色・橙色 普通	30% (2片) Y 底部外周を縁で赤彩
2	坏形土器 土師器	A 14.6 B 6.0	体部は半球形で、深い。口縁部は外反し、内面に稜をもつ。口縁部の器厚が薄い。丸底である。	口縁部内外面横ナデ、体部外面へラナデ、内面ナデ。	多量の赤砂、赤色 普通	60% (8片) X 赤彩 外面に煤
3	坏形土器 土師器	A 11.4 B 6.1 C 5.0	体部は内斡して立ち上がり、上部でくびれる。口縁部は直く、外傾し、内面に稜をもつ。口縁部の器厚が薄くなっている。	口縁部外面ナデ、体部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。	多量の砂、灰色砂 浅黄褐色 不真(二次焼成)	95% (3片) X
4	坏形土器 土師器	A 12.8	体部は半球形で底部欠損。口縁部は内ソグで、内面に稜をもつ。外面に稜を突する。	内外面ナデ。	褐色、スコリア にぶい橙色 良好	20% (4片) X
5	瓶形土器 土師器	A 11.9	胴部の上位は肥厚し、口縁部は直く、外傾す。内面に稜が2か所ある。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へラ削り、内面ナデ。	緻密 橙色 良好	10%
6	土師器	A (5.9) B 3.1 C (3.5)	体部・口縁部は外傾へしわり出しており、口縁部が尖っている。	外面凸凹。	褐色、スコリア 外赤褐色・内面黒色 普通	70% Y
7	手捏土器 土師器	A 7.3 B 4.0 C 5.7	体部は底部上でくびれ、内斡しながら立ち上がる。	内外面凸凹で、粘土くず付着。底部平らにナデ調整。	褐色 浅黄褐色 不真(二次焼成)	100% X
8	土師器		口縁部は外反し内面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面へラ削り、内面ナデ。	黒色砂、スコリア 橙色 良好(二次焼成)	10% (8片)
9	短頸甕形土器 土師器	A 11.0 B 10.2 C 2.5	口縁部は直く、やや外傾する。胴部はほぼ球形である。底部は丸底さみの小さな平底である。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面側へラ削り、内面へラナデ。	多量の赤砂、赤褐色・にぶい黄褐色 普通(二次焼成)	70% (2片) Y 赤彩 上半に煤

第12号住居跡 (第102図)

本跡はE21a区を中心に確認された竪穴住居跡で、本跡の南西側は斜面となっており、北東11mに第10号住居跡、南東13mに第13号住居跡が隣接している。

平面形は、長軸6.59m・短軸5.00mの長方形を呈し、長軸方向はN-34.4°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北東壁で38cm、南西壁で21cmと南東壁が低くなっている。壁溝は検出されていない。床面の南西側はやや傾斜し、北東側は平坦である。床面は比較的硬く、特に貯蔵穴の西側、長径1.4m・短径0.5mの範囲は、ややもり上がっていて硬く踏み固められている。炉は2基検出されている。炉1は北西壁寄りに位置し、長径90cm・短径70cmの楕円形を呈し、凹状に8cmほど掘りくぼめられた地床炉である。覆土には焼けたロームブロックが多量に含まれ、炉床も赤色に硬く焼けており長期間使用されたものと思われる。炉2は炉1から2.4mほど離れた南東壁側に位置し、長径70cm・短径60cmの楕円形の範囲の床面が赤色に硬く焼けており床面を掘



第101図 西原遺跡第11号住居跡出土遺物実測図

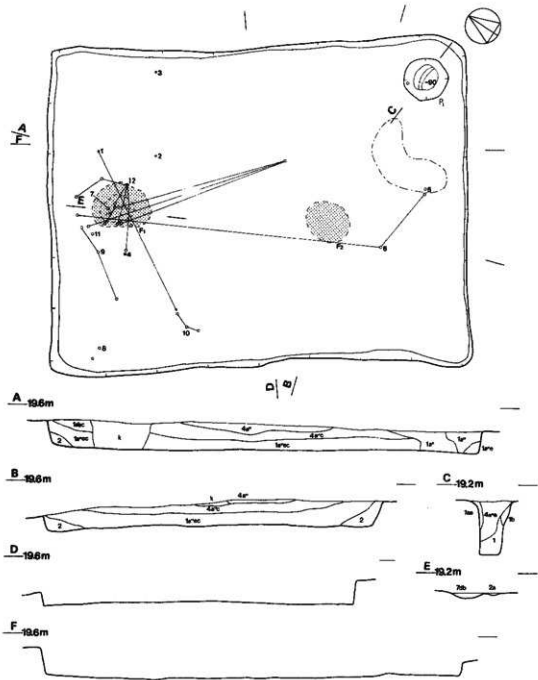
りくぼめないで使用した地床炉である。貯蔵穴は東コーナー部に位置し、開口部の平面形が67cmほどの円形で、底面は長径36cm・短径20cmの楕円形を呈し、平坦である。深さは90cmほどである。貯蔵穴の覆土は2層で、上層が黒褐色、下層が暗褐色で、上下層とも埋め戻されたものと思われる。

本跡の覆土は、3層で自然堆積し、硬く締まっている。中上層は黒褐色土、下層は暗褐色土で微量の炭化粒子・焼土粒子を含んでいる。

出土遺物は、土師器及び土師器片212点である。土師器の器種は、甕形土器・甔形土器・短頸壺形土器・環形土器である。遺物は北西部の炉1付近に集中しており、ほぼ完形に復元できた12の甕形土器は、床面から1か所にまとまって出土している。8の甕形土器の口縁部片は広範囲に散らばっており、5.5mほど離れた破片と接合している。口縁部から底部まで2分の1ほど復元された甔形土器の10は、床面に押しつぶされた状態で出土している。完形で出土したものは、2の環形土器と4の短頸壺形土器の2点で、炉1の東側と西側の床面直上から出土している。

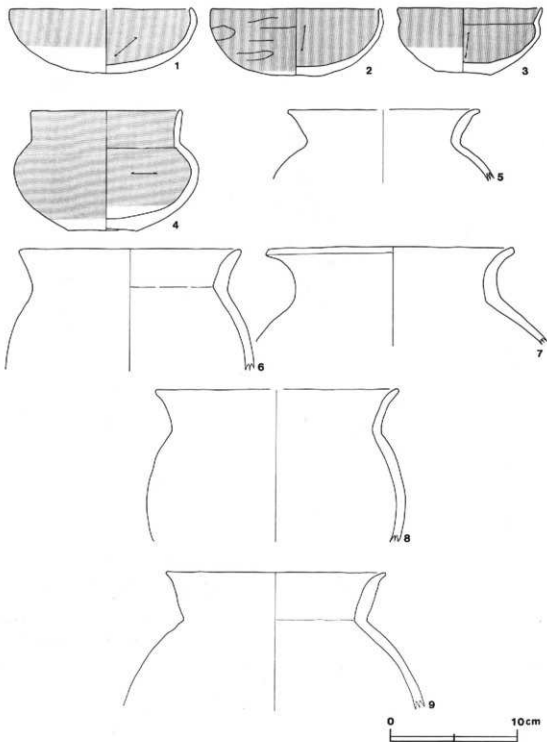
第12号住居跡出土土器解説表（第103・104図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・装成	備考
1	環形土器 形 土師器	A(14.7) B 5.1	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、最大径を上位にもつ。口縁部は短く、内傾する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ヘラミガキ。	多量の砂 棕色 普通	30% (12片) Y 体部下位を除き赤彩 内面に斑点状刺摩
2	環形土器 土師器	A 13.4 B 5.3 C 2.5	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、上位で最大径となる。口縁部は短く、内傾する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ヘラミガキ、施な調整。	砂 赤色 普通 (二次焼成)	100% X 底部を除き赤彩 内面に斑点状刺摩
3	環形土器 土師器	A(11.3) B 5.3 C 4.3	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり上位でややぐびれる。口縁部は外傾し、内面に横をもつ。	口縁部内外面ハケ目調整横ナデ。体部外面へラ削り、内面ヘラミガキ。	細砂 赤色 良好 (二次焼成)	50% (3片) X 赤彩 内面に斑点状刺摩
4	短頸壺形 土器 土師器	A 11.8 B 9.6 C 5.4	口縁部は長く、直立する。胴部は内彎しながら立ち上がり、上位で最大径となりぐびれる。	口縁部外面ハケ目調整横ナデ。体部外面へラ削り、口縁部内面横ナデ。体部内面横なヘラミガキ。	砂、黒赤母 赤色 普通	100% X 赤彩、外面に斑 底部に斑点状刺摩
5	甕形土器 土師器	A(14.8)	口縁部は外反し、上位で更に外反する。口縁部の器厚は、胴部より厚く上位では薄くなる。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ナデ。	硬、多量の砂 砂母 明赤褐色 良好 (二次焼成)	5% Y
6	甕形土器 土師器	A(16.8)	口縁部は外反する。口縁部の器厚は体部より厚い。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ヘラナデ。	砂、黒色砂 褐色 良好 (二次焼成)	15% (5片) Y
7	甕形土器 土師器	A 19.6	口縁部は直立後、中位から強く外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ナデ。	灰石、多量の砂 褐色 不具 (二次焼成)	30% (13片) Y
8	甕形土器 土師器	A(19.0)	口縁部は外傾し、上位で外反する。口縁部の器厚は胴部より薄くなっている。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面ヘラナデ。	細砂 よい赤褐色 普通 (二次焼成)	10% (3片) X 内外面磨減

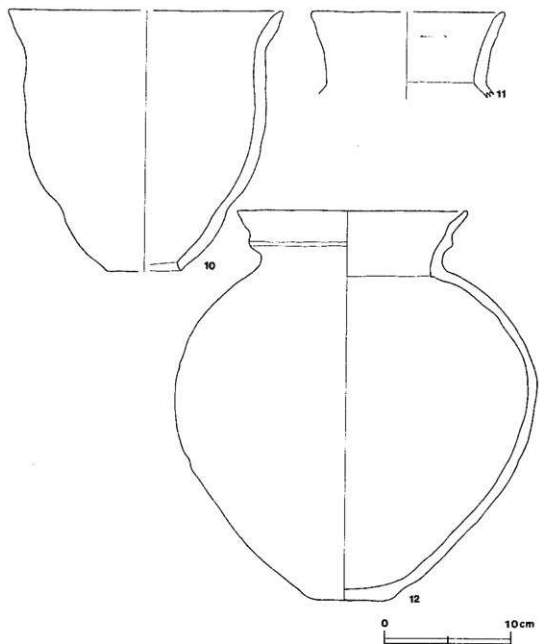


第102図 西原遺跡第12号住居跡実測図

番号	器種	法量(m)	彫刻の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
9	袋形土器 土師器	A 17.2	口縁部はくの字に外傾し、肩部で薄くなって外反する。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ナデ。	多量の細砂、雲母にふいば色不良	40% (22片) X+Y 斑点状剥離
10	瓶形土器 土師器	A 21.6 B 20.6 C 6.0	胴部は内彎しながら立ち上がり、中位から直立する。口縁部は、外傾し縁部で実る。底部に大きな孔がある。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へう張り、内面ヘラナデ。器底は凸凹で縁を調整。	多量の砂、黒色砂褐色不良	70% (22片) Y
11	壺形土器 土師器	A (15.1)	口縁部は長く、外傾して立ち上がる。口縁部の器厚は胴部より薄い。	口縁部外面横ナデ、内面へう張り。	砂、細砂、黒色砂褐色良好(二次焼成)	10% (2片) Y
12	壺形土器 土師器	A (18.1) B 30.8 C 6.5	口縁部は中位で屈曲し、外反する。胴部は最大径を上位にもつ球形である。平底。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へう張り、内面ナデ。内外面は磨減。	多量の細砂褐色不良	80% (95片) X+Y



第103図 西原遺跡第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第104図 西原遺跡第12号住居跡出土遺物実測図(2)

第13号住居跡（第105図）

本跡は調査区域南端のF2c6区を中心に確認された竪穴住居跡で、南へ傾斜する標高19mほどの斜面部に位置する。本跡の南東側10mに14号住居跡、北西側13mに12号住居跡が隣接する。

平面形は、長軸6.32m・短軸6.25mの正方形を呈し、長軸方向はN-57.2°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は25-50cmほどである。壁溝は北東壁と南東壁に部分的に検出され、幅が15cm、深さが10cmほどの小規模なものである。床面は全体的に平坦で硬くなっている。東コーナー部の貯蔵穴の西側や、南東壁ぎわの長径90cm・短径80cmの範囲が7cmほど高くなっていて、特に硬く踏み固められている。

炉はP1-P4の主柱穴の内側に5基検出され、いずれも床面を炉床としたもので床面が赤色に硬く焼けている。炉1はP1の南西側に位置し、平面形が長径40cm・短径30cmの楕円形である。炉2はP4の北東側に位置し、平面形が長径50cm・短径40cmの楕円形である。炉3はP3の北西側に位置し、平面形が長径75cm・短径50cmの楕円形である。炉4は炉3とP3の間に位置し、平面形が長径90cm・短径55cmの不定形である。炉5はP3の北東側に位置し、長径115cm・短径30cmの不定形である。

ピットは5か所検出され、規模や配列からP1-P4が主柱穴、P5が貯蔵穴と思われる。主柱穴は円筒状で垂直に掘られ、規模はP1が長径38cm・短径34cm・深さ68cm、P2が長径32cm・短径31cm・深さ76cm、P3が長径32cm・短径29cm・深さ76cm、P4が長径32cm・短径31cm・深さ75cmで、底面がそれぞれ直径20cm前後で、平坦に固められている。P1の覆土中に炭化材、P2の覆土中に焼土ブロックが含まれていた。主柱穴はほぼ対角線上に位置し、軸間の長さは南北で3.65m、東西で2.8-3.25mである。貯蔵穴は、開口部が長径67cm・短径53cmの楕円形、底面が長径28cm・短径26cmの円形を呈し、深さが85cmで深くなるほど狭く掘られている。貯蔵穴の覆土は、4層からなり、1層の暗褐色土は10cmほどの厚さで、焼土粒子と炭化物を多量に含んでいる。これに対し、3・4層は褐色土で60cmほどの厚さがあり、混入物がなく、さらさらとしている。

本跡の覆土は、3層からなり、上層と下層が褐色土、中層が極暗褐色土でレンズ状に自然堆積している。炭化材が壁ぎわの覆土上位から床面中央部へ傾斜した状態で検出されている。また焼土が床面南部の壁に近い覆土の中位から、床面中央部へ傾斜して堆積している。

出土遺物は土師器及び土師器片32点、砥石1点、滑石製の勾玉1点である。土師器の器種は甕形土器・甕形土器・甕形土器である。土師器は炉2の北西側に集中しており、半分ほど復元できた甕形土器が2点、ほぼ完形に復元できた小形の甕形土器が1点、床面から出土している。ほぼ完形に復元できた甕形土器5は、南コーナー付近の覆土から折り重なってつぶれた状態で出土したが、そこから北へ4.4m離れた床面から出土した破片が接合された。勾玉は北東壁近くの床面から、砥石は、P3の壁から中央部へ斜位に出土している。これらの出土遺物は、出土状況から本跡に伴うものと思われる。

第13号住居跡出土土器解説表 (第106図)

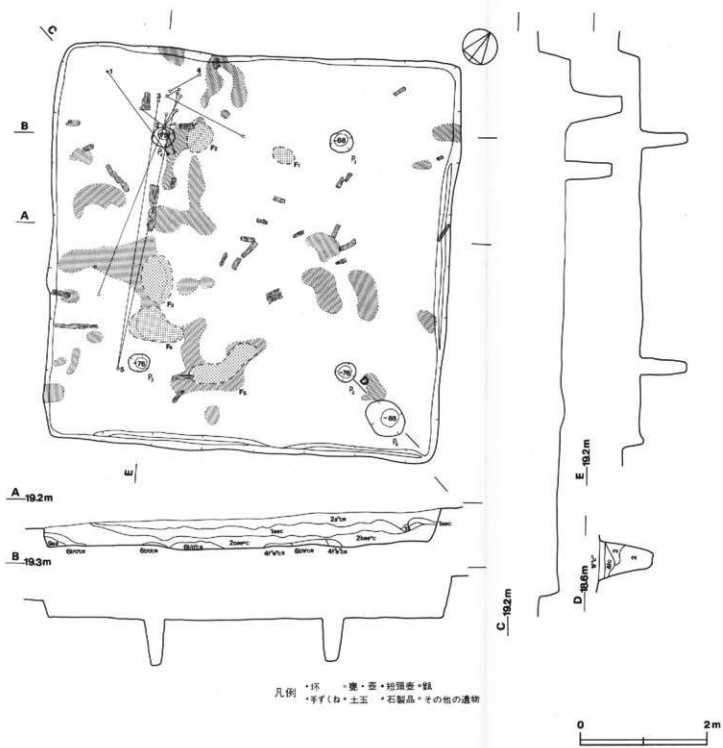
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1	環形土器 土師器	A (11.8) B 7.6	体部は強く内彎して立ち上がる。 口縁部は器厚が薄く、直立後外 反し、内面に稜をもつ。丸底さ みの平底である。	口縁部内外面滑ナテ。体部外面 へう削り、内面へうナテ。	砂、黒色砂 赤色 普通	80% (11片) X + Y 底面を除き赤彩 内面に斑点状刺摩
2	甕形土器 土師器	A (20.4)	口縁部は頸部でくの字に外傾し、 上位で更に外傾する。胴部は球 形を呈する。	口縁部内外面滑ナテ。胴部外面 へう削り、内面へうナテ。	細砂 粒色 普通 (二次焼成)	50% (28片) X + Y
3	甕形土器 土師器	A 15.5	口縁部は胴部で直立後外反する。 胴部は長胴である。	口縁部内外面滑ナテ。胴部外面 へう削り、内面へうナテ。胴面 凸凹で稜を調整。	砂、砂、黒色砂 粒色 良好 (二次焼成)	60% (24片) X + Y
4	甕形土器 土師器	A 14.5 B 14.8 C 7.0	口縁部は外反する。胴部は筒の はる球形である。	口縁部内外面滑ナテ。胴部外面 へう削り、内面へうナテ。	多量の砂、黒色砂 赤色 普通 (二次焼成)	80% (32片) Y
5	甕形土器 土師器	A 25.3 B 23.3 C (6.9)	口縁部は外傾し、頸部は平らで ある。胴部は内彎しながら直立 ぎみに立ち上がる。底部に大き な孔を有する。	口縁部外面滑ナテ。内面ハケ目 調整。胴部下部を除きハケ目調 物。下部ナテおよびへう削り。 内面ハケ目ナテ。	細砂 淡黄褐色 良好 (二次焼成)	99% (16片) Y 斑点状刺摩

磁石 (第106図)

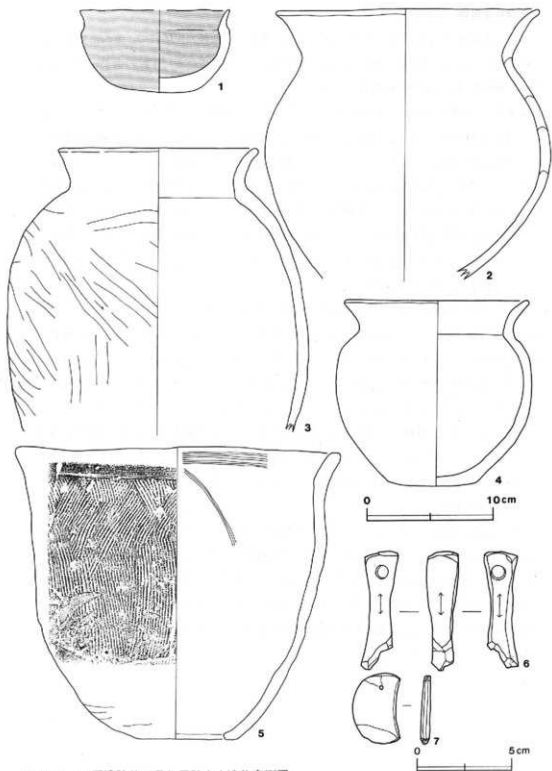
6は長辺の4面が皿状に磨り減っており、一部は欠損している。一端に孔が貫通しており、孔の一方の直径は6.7~7.0mmで、他方は7.4~7.6mmである。現存する法量は幅1.8cm・長さ6.3cm・厚さ1.6cm、重量18gである。石質は流紋岩である。

勾玉

7は板状を呈し、石質は滑石製である。表・裏面にわずかに擦痕が認められ、側縁には横位の削り痕が認められる。法量は長径31.3mm・短径22.2mm・厚さ4.5mm、重量7gであり、孔径は1.5mmである。



第105図 西原遺跡第13号住居跡実測図



第106図 西原遺跡第13号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡（第107図）

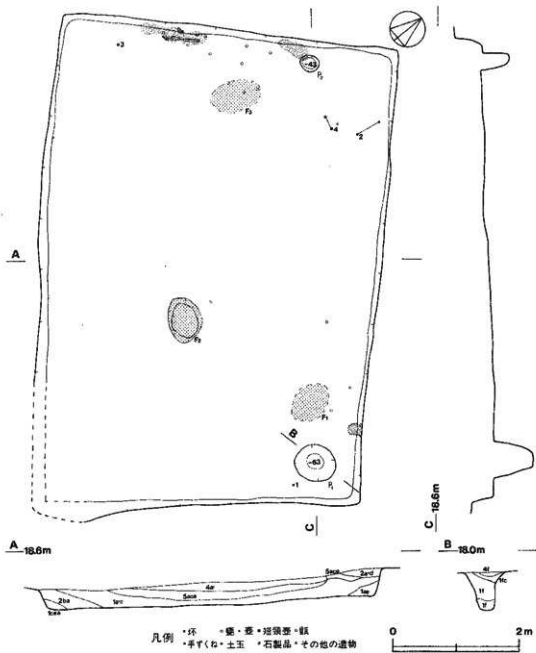
本跡は調査区域の南端にあたるF3f区を中心に確認された竪穴住居跡で、南へ傾斜する斜面部に構築されている。本跡の北西10mに第13号住居跡が隣接している。本跡の南コーナー一部は調査区域の南側を通る道路のため調査できなかった。

平面形は、長軸7.48m・短軸5.42mの長方形を呈し、長軸方向はN-43.5°-Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は25~40cmで、北西壁が高くなっている。床面は平坦であるが、やや南東方向へ傾斜しており、3基の炉の南東側の床面は硬く踏み固められている。炉はいずれも中央から壁寄りに位置し、床面を掘りくぼめない地床炉で、炉床が赤色に硬く焼けている。炉1は北東壁寄り、貯蔵穴(P1)の北西側に位置し、平面形が長径70cm・短径50cmの楕円形である。炉2は床面中央部の南側に位置し、平面形が長径56cm・短径40cmの楕円形である。炉3は北西壁寄りに位置し、平面形が長径80cm・短径48cmの楕円形である。炉1と炉3の炉床から赤色に強く焼けた土師器片が出土している。

ピットは2か所検出され、規模や配置からP1が貯蔵穴と思われる。貯蔵穴は東コーナー部に位置し、開口部の平面形は長径63cm・短径57cmの楕円形、底面は長径28cm・短径22cmの楕円形で、深さが63cmであり、断面形は漏斗状を呈している。貯蔵穴の覆土は暗褐色土を主体とする4層からなり、覆土中に炭化粒子が含まれている。P2は北西壁ぎわに位置し、平面形が長径30cm・短径26cmの楕円形を呈し、深さは43cmであるが、柱穴と判断することができなかった。

本跡の覆土は自然堆積の状況を示す3層からなり、上層に黒褐色土、中層に黒色土、下層に暗褐色土がレンズ状に堆積している。北東壁ぎわおよび南東壁ぎわに焼土域が3か所検出され、この焼土上に長さ25cmほどの炭化材が横たわっていた。炭化材の出土状況などから本跡は火災に遭ったものと思われる。

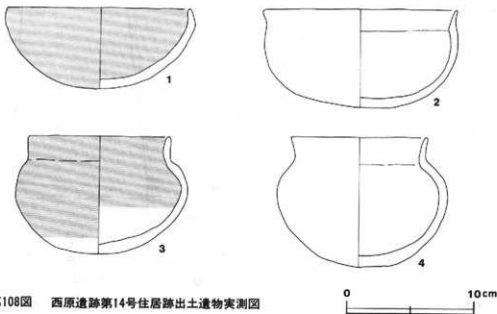
出土遺物は縄文式土器6点、土師器及び土師器片272点である。土師器の器種は甕形土器・短頸壺形土器・坏形土器である。遺物は3基の炉の周囲から多く出土している。甕形土器は小片が多く、器形が窺えるほどに復元できたものはない。完形または完形近くに復元できたものは、短頸壺形土器2点、坏形土器2点で、それぞれ壁近くの床面から出土している。土師器は出土状況から本跡に伴うもので、縄文式土器は覆土上位からの出土であることから後世流れ込んだものと思われる。



第107図 西原遺跡第14号住居跡実測図

第14号住居跡出土土器解説表 (第108図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1	環形土器 土器部	A 14.5 B 6.4	体部は半球形で丸底である。口縁部は短く、内傾する。	内外面とも刷毛かワシで調整方法不明。	砂(多量) 明赤褐色 不良	80% (4片) X 内外面に赤彩
2	環形土器 土器部	A 15.4 B 7.8	体部は内傾しながら直立して立ち上がり、深いつくりである。口縁部は器厚が薄く、やや外傾する。内面に横をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラナデ。	磁砂 赤褐色 普通(二次焼成)	90% (15片) X+Y
3	短頸密形 土器部 土器部	A 11.1 B 9.3	口縁部は直立する。胴部は球形で丸底である。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。	砂、黒色砂 に濃い赤褐色 不良(二次焼成)	100% (3片) Y 赤彩
4	短頸密形 土器部 土器部	A 10.7 B 10.2	口縁部は器厚が薄くやや外傾する。胴部は球形で、丸底である。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面ナデ。	黒色砂 赤色 普通(二次焼成)	90% (28片) Y



第108図 西原遺跡第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡 (第109図)

本跡は、調査区域の西端にあたるD1h区を中心に確認された竪穴住居跡で、本跡の南西側は谷津に向かって傾斜している。北東22mに第7号住居跡が隣接している。

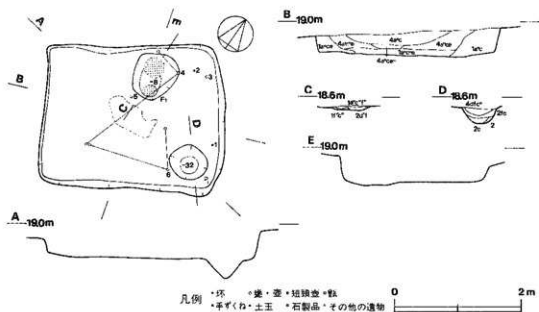
平面形は、長軸2.86m・短軸2.25mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-60.5°-Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北西壁で40cm、南東壁で26cmと南東壁が低くなっている。南東側の壁高が低いのは、本跡が南東に傾斜している地点に構築されていることによるものと思われる。壁溝は検出されていない。床面は平坦なロームで、炉の南側に東西に細長く85cm×45cmの部分が硬くなっている他は軟らかである。炉は北西壁下に位置し、長径80cm・短径70cmの楕円

形を呈し、皿状に8cmほど掘りくぼめられた地床炉である。炉床は、南側と北側の大小2か所が直径30cmと20cmの円形に赤く焼けており、2基のかが重複している。覆土中には焼土および炭化物が多量に含まれており、炉の使用回数が多かったものと思われる。

貯蔵穴(P1)は東コーナー部に位置し、開口部の平面形が長径63cm・短径55cmの楕円形を呈し、深さが32cmほどの錐鉢状を呈している。貯蔵穴の覆土は3層に分けられ、上層が黒褐色土、中・下層が褐色土で、自然堆積を示している。上・中層には多量の焼土粒子と炭化物が含まれている。

本跡の覆土は、レンズ状に3層に自然堆積している。上・中層は黒褐色土、下層は暗褐色土で、10cmほどの厚さの下層中には、焼土粒子と炭化物が特に多く含まれている。

出土遺物は、土師器及び土師器片17点で、器種は甕形土器・環形土器である。甕形土器と環形土器のそれぞれ2点は、完形またはほぼ完形に復元された。遺物は西コーナー付近と南コーナー部を除いた床面にまばらに出土している。これらの出土遺物は、本跡に伴うものと思われる。



第109図 西原遺跡第15号住居跡実測図

第15号住居跡出土土器解説表（第110図）

番号	器種	法量(cm)	形状の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	環形土器 土師器	A 14.2 B 5.8 C 5.4	体部は内彎ぎみに大きく開いて立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面へラミガキ、内面は差な放射状のへラミガキ。内面の下部に赤で+印。	砂、多量の黒色砂 褐色 良好	100% Y 内外面上部に赤彩
2	環形土器 土師器	A 10.1 B 4.1 C 3.2	体部は内彎しなから大きく開いて立ち上がる。口縁部は直立後、短く、外反する。	口縁部外面横ナデ。体部外面へラ開り。内面へラナデ。	細砂、多量の黒色砂 にぶい褐色 良好（二次焼成）	100% Y
3	甕形土器 土師器	A 11.7	口縁部は胴部でくの子に屈曲し外傾する。胴部は大きくゆがんでいる。	口縁部内外面ナデ。	砂、黒色砂 褐色 良好	15% Y
4	甕形土器 土師器	A 12.3 B 17.2 C 5.2	口縁部は縦やかに外反する。胴部は球形で器面が凸凹である。平底である。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ開り。	細砂 褐色 良好	99%（9片） X+Y 外面に薄 底部に斑点状刻線
5	甕形土器 土師器	A 15.2 B 13.2	口縁部は短く、外反し、尖る。胴部はほぼ球形を呈する。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ開り。内面へラナデ。	砂、多量の黒色砂 褐色 普通（二次焼成）	60%（35片） Y 外面に斑点状刻線
6	甕形土器 土師器	A (23.7)	口縁部は直立後外反する。胴部は球形である。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ開り。内面ナデ。	泥、砂、スコリア 明赤褐色 良好（二次焼成）	40%（14片） X+Y 斑点状刻線

2 土坑

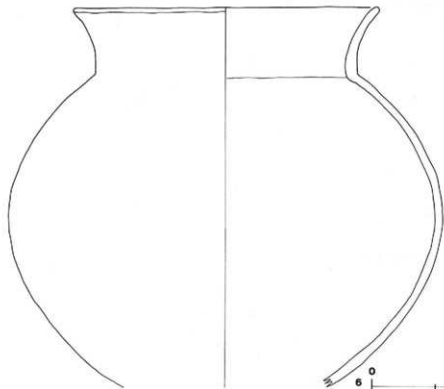
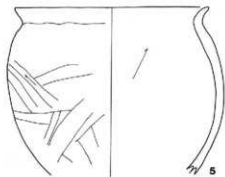
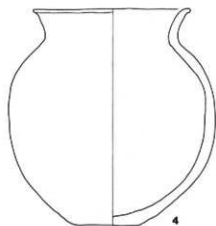
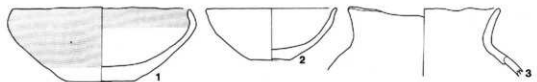
第3号土坑（第111図）

本跡は、C2₁区に確認され、南1.5mに第1号住居跡が隣接する。平面形は長径1.3m・短径1.1mの楕円形を呈し、長径方向はN-92°-Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は26cmほどである。底面は平坦で締っている。覆土は2層で、上層がローム粒子を多量に含む黒褐色土で厚くレンズ状に堆積し、下層がロームブロックを多量に含む暗褐色土で薄く堆積している。遺物は出土していないが、形状・規模が、第4号土坑と類似しており、位置などからも古墳時代の住居跡と同時期と思われる。

第4号土坑（第111図）

本跡は、C3a₁区に確認され、南東8mに第1号住居跡、同6mに第5号土坑が隣接している。平面形は、長径1.66m・短径1.58mのほぼ円形を呈している。壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は30cmほどである。底面は中央部がやや凹んでいる。覆土は4層からなり、2層の黒褐色土がレンズ状に堆積している。

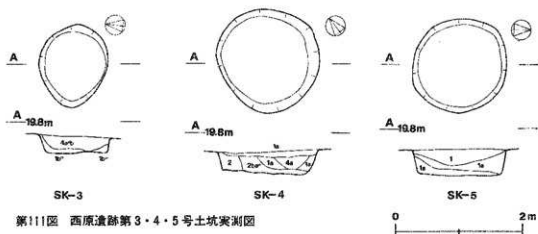
遺物は土師器片15点が、北西側から流入した最下層の中位から床面にかけ出土している。土師器片は甕形土器の胴部小片で図示できないが、胎土・色調・焼成が住居跡内出土の甕形土器と同じであるので住居跡内出土の土師器と同型式と思われる。



第110図 西原遺跡第15号住居跡出土遺物実測図

第5号土坑（第111図）

本跡はC3b区を中心に確認された土坑で、東3.5mに第1号住居跡、北西6mに第4号土坑が隣接している。平面形は直径1.48mの円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は35cmほどである。底面はやや凸凹で踏み固められている。覆土は暗褐色土が3層、レンズ状に自然堆積している。遺物は出土していないが、形状、規模などが第6号土坑に類似しており、位置などからも古墳時代の住居跡と同時期と思われる。



第111図 西原遺跡第3・4・5号土坑実測図

第6号土坑（第112図）

本跡はC2c区に確認された土坑で、南東14mに第2号住居跡が隣接している。壁が一部攪乱を受けて形がくずれているが、平面形は直径1.76mの円形であったと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高38cmほどである。底面はやや凸凹で、部分的に硬く踏み固められている。覆土は3層で自然堆積の様相を示している。上層が極暗褐色土、中層が黒褐色土、下層が暗褐色土で、各層ともロームブロックを含んでいて軟らかである。

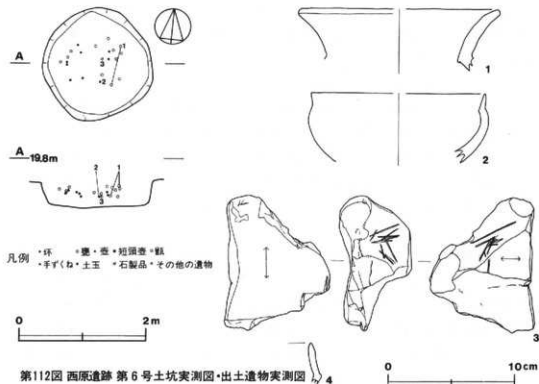
出土遺物は、土師器片101点、土玉1点、砥石1点が出土した。遺物は壁さわから底面中央部へやや流れ込むように出土している。

第6号土坑出土土器解説表（第112図）

番号	器種	数量(点)	器種の特徵	手法の特徵	粘土・色相・焼成	備考
1	灰形土器 土師器	A (15.6)	口縁部で、口縁部は大きく外反する。	口縁部内外縦溝ナゲ。	細砂に赤褐色不良（二次焼成）	15%（3片） X
2	灰形土器 土師器		口縁部は反り少く、やや外反する。口縁部の器厚は、体部より薄い。	口縁部内外縦溝ナゲ。体部外周へラ彫り、内面ナゲ。	細砂赤褐色良好（二次焼成）	15%（2片） X

砥石 (第112図 3)

砥石は2面が皿状に、他の一面は平らに磨り減っている。もう一面は割れたままの面で、細い直線の溝が10本ほど認められる。法量は幅8.0cm・長さ10.5cm・厚さ5.6cm、重さ357gである。石質は流紋岩である。



第112図 西原遺跡 第6号土坑実測図・出土遺物実測図

3 遺構外出土の遺物

遺構確認作業などの過程で古墳時代の遺物として、土師器片 605 点、須恵器片 1 点が出土している。

土師器 (第112図 4)

土師器は、調査区全域から破片で出土し、これらの土師器は住居跡出土の土師器と同一型式のものである。その中で、小片ながら典型的な須恵器模倣の环形土器片が1点出土している。4は口縁部内・外面とも横ナデ調整され、色調は橙色である。胎土は細砂を含み、焼成は良好である。

須恵器

須恵器の1点は、小片で器形は不明であるが、住居跡出土の須恵器と同一型式のものと考えられる。

第5節 その他

第1号土坑（第113図）

本跡は、D2c1区に確認された土坑で、第7号住居跡の南東壁を切って構築されている。本跡は第7号住居跡を調査中に検出されたものである。平面形は、直径0.4mほどの円形を呈していたものと思われる。壁は垂直に立ち上がり、壁高は38cmほどである。底面は平坦である。覆土中に焼土が多量に含まれていた。

本跡の底面から大きな丸石3点と小さな割れ石3点が東西1列に並べたような状況で出土した。丸石は、東側の2点が長径を南北に向け、西側の1点が長径を東西に向けてすまなく並べてあった。割れ石は西端の丸石の西側にかためられてあった。丸石の3点は大きさが10×8×5cmほどで、石質は2点がチャート、1点が安山岩である。割れ石の3点は大きさが6×4×2cmほどで、石質は流紋岩で、二次焼成を受けている。本跡の時期は第7号住居跡より新しいが、時期を限定することはできなかった。

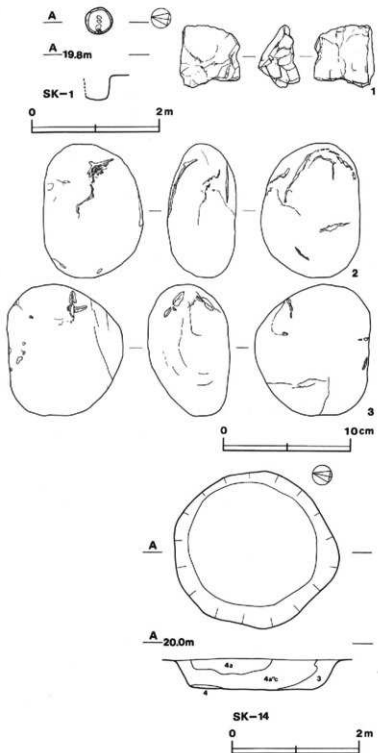
第14号土坑（第113図）

本跡は、E3c3区を中心に確認された土坑で、北側15mに第9号住居跡、南側13mに第11号住居跡が隣接している。平面形は長径2.6m・短径2.45mのはほぼ円形を呈している。壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦で硬くなっている。壁高は44cmほどである。覆土は黒褐色土を主体とする3層からなり、各層ともよく締まっている。本跡に伴うと思われる遺物は出土しておらず、本跡の性格、時期ともに不明である。

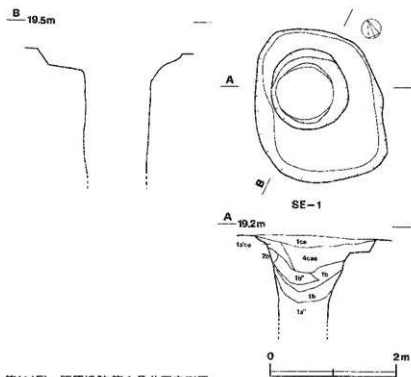
第1号井戸（第114図）

本跡C3h3区を中心に確認された円筒形の井戸である。井戸の内径は0.9mで、垂直に掘り下げられている。確認面から2mまで掘り下げたが、水は出てこなかった。この面から1.6mの長さの鉄棒を突きさしたところ底面に当たらないので3.6mをこえる深さがあるものと思われる。ハーンドロームの硬い壁には鋭利な刃の痕跡が残っている。井戸の上部は、長径2.65m、短径2.00m、深さ30cmほど広く掘られている。この広い部分は底面が踏み固められていないので井戸の足場と断定することはできない。井戸の覆土は、5層から下は埋め戻しと思われる。

遺物は、本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。掘り込みの形状から判断すると、近世以降と思われる。



第113图 西原遺跡第1号土坑実測図・出土遺物実測図・第14号土坑実測図

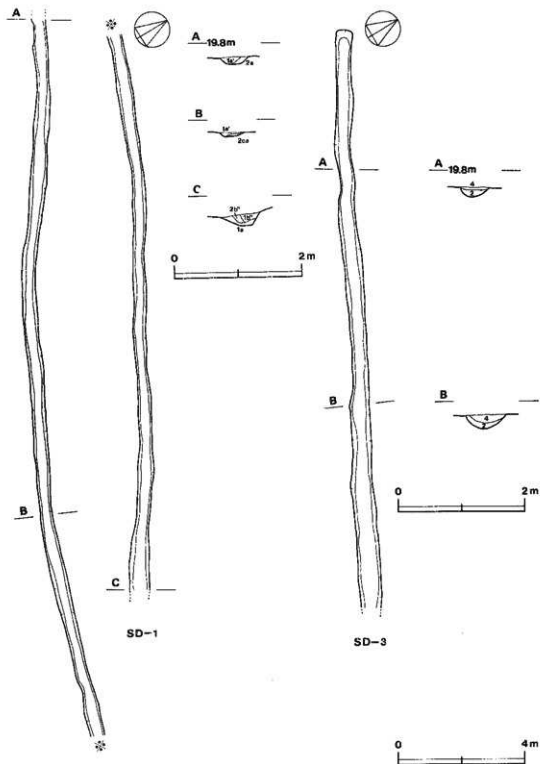


第114図 西原遺跡第1号井戸突測図

第1号溝（第115図）

本跡は、調査区域の西端のB3ds区から東端のB4iz区にかけて確認された溝であり、溝の内端とも調査区域外へと延びている。

溝はB3ds区から南東方向へほぼ直線的に延びてB4iz区に達しており、全長は40mである。確認面における幅は35～65cm、底面における幅は20～45cmで、断面形状が皿状である。確認面から溝底面までの深さは5～18cmと浅く、溝底面のレベルは北西端で19.5m、南東端で19.3mであり、南東方向へゆるやかに傾斜している。溝内の覆土は、上層にローム粒子を含む暗褐色土が、下層には褐色土が自然堆積している。覆土は軟らかであり、新しい時期に堆積したと思われる。遺物は出土していない。



第115图 西原遺跡第1・3号溝突測図

第2号溝（第116図）

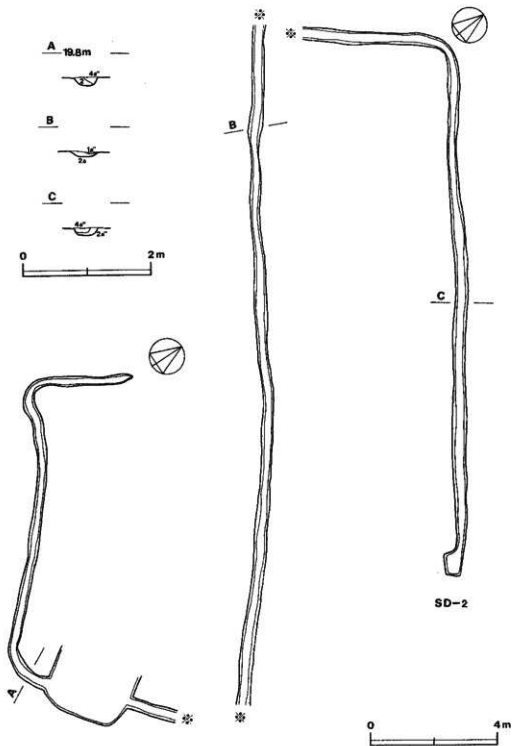
本跡は、C2i4区からC3g4区にかけて確認された溝で、C2je区で第4号住居跡を掘り込み、C3ez区からC3g4区にかけて第2号住居跡の北東壁にそって掘られている。

溝はC2i4区から南西方向へ2m直線的に延びて、C2i4区の南側でほぼ直角に南東方向へ屈曲し10mほど直線的に延びている。溝はさらにD2a6区でほぼ直角に北東方向へ屈曲し、32m直線的に延び、また、C3c1区でほぼ直角に南東方向へ屈曲し17m直線的に延びている。溝の全長は61mで確認面における幅は30～40cm、底面における幅は20～25cmで、断面形状は皿状である。確認面から溝底面までの深さは、6～15cmと浅く、溝底面のレベルは、C3e1区のコナー一部が19.41mと高く、これより両端へ行くほど低くなり、南東端のC3g4区で19.18m、北東端に近いC2i4区で19.10mである。溝内の覆土は、上層にローム粒子を多量に含む黒褐色土または暗褐色土が、下層には褐色土が自然堆積している。覆土は軟らかであり、新しい時期に堆積したものと思われる。遺物はC2ii区覆土から陶器のスリバチの小片が1点出土しているが、本跡に伴うものとは思われない。

第3号溝（第115図）

本跡は、E3i4区から調査区域南東端に位置するF3a7区にかけて確認された溝であり、溝の南東端は調査区域外へと延びている。

溝はB3i4区から南東方向へほぼ直線的に延びてF3a7区に達しており、全長は18mである。確認面における幅は45～65cmで、断面形状は皿状である。確認面から溝底面までの深さは14～22cmであり、溝底面のレベルは北西部が19.39m、南東部が19.37mとやや南東へ傾斜している。溝内の覆土は、上層に黒褐色土、下層に褐色土がレンズ状に自然堆積している。覆土はやや締っているがごく近年に堆積したものと思われる。遺物は覆土中に縄文時代早期茅山式の土器小片が9点出土しているが、本跡に伴うものとは思われない。



第116图 西原遺跡第2号溝突測図

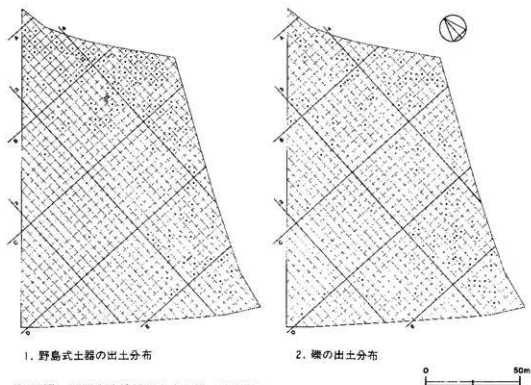
第6節 ま と め

当遺跡からは縄文時代早期野島期の竈穴1基、古墳時代鬼高期の住居跡15軒、同期の上坑4基、時期不明の土坑2基、井戸1基、溝3条が検出された。ここでは、古墳時代の住居跡の時期と土師器の特徴などを中心にまとめることにする。

1 縄文時代の遺構・遺物について

当遺跡からは、縄文時代の遺構として調査区域の北東端に縄文時代早期野島期の竈穴1基が検出された。第1号竈穴は竈床部を除き削平されてしまって、形状・規模をとらえることができなかったが、竈床付近に野島式土器がまとまって出土し、野島式土器の組み合わせを考える上で良好な資料を得た。

遺跡の北東側には、野島式土器が第117図のように分布し、当遺跡の北側40mの地点には北から入り込んだ谷津があり、この谷津に面する台地縁辺部に野島期の遺跡があると想定される。したがって第1号竈穴はこの野島期の遺跡の南端に位置しているものと思われる。



第117図 西原遺跡遺構外出土土器・礫分布図

塚穴からの出土遺物には、典型的な野島式土器である微隆起線文の施された1群1類の土器と、土器の内・外面に条紋文だけが施された1群2類の土器が共存していた。

2 古墳時代の住居跡の構造について

当遺跡から検出された住居跡に関する計測値は一覧表に記載した通りである。

住居の規模は、床面積が70㎡以上の大形のものが2軒、10㎡以上70㎡未満の中形が11軒、10㎡未満の小形のものが2軒で規模に齊一性は認められなかった。平面形は3軒が正方形で、他の12軒は長方形であり、形の中がんでいるものが多い。獣溝のある住居は、正方形の第11号住居跡と

表9 西原遺跡住居跡一覧表

住居 番号	位 置	長 軸 方 向	平面形	規 模		壁 高 (cm)	味 方 溝 数	柱穴 数	貯蔵 穴 数	火 災	出 土 遺 物	時 期
				長軸×短軸 面積(㎡)	壁高							
1	C30a	N-6°-E	正方形	9.48×9.24 87.6	12	無	4	4	1	有	土師器-環・冠形壺・鉢・甕、土器-高杯・壺、土玉、白土	古墳時代 鬼高期
2	C36a	N-55°-W (N-35°-E)	長方形	9.94×7.90 78.5	23	無	1	4	2	有	土師器-環・埴・冠形壺・鉢・甕・壺、土器-土玉、及孔内板、磁石	古墳時代 鬼高期
3	D28a	N-65°-E	長方形	4.44×3.10 13.8	14	無	1	0	1	有	土師器-環・埴・冠形壺・鉢・甕・壺・壺、土器-環・壺、及孔内板	古墳時代 鬼高期
4	C28a	N-37.8°-W (N-52.2°-E)	隅丸長方形	3.92×2.66 10.4	10	無	1	0	0	有	土師器-環・埴・壺	古墳時代 鬼高期
5	D26a	N-50°-E	長方形	6.40×5.09 32.6	29	無	2	0	1	有	土師器-環・冠形壺・壺・壺、土玉	古墳時代 鬼高期
6	D22a	N-44.2°-E	隅丸長方形	2.92×2.48 7.2	36	無	3	0	0	有	土師器-環・冠形壺・壺・壺、土玉、白土	古墳時代 鬼高期
7	D12a	N-72°-E	長方形	5.27×4.30 23.1	36	無	1	0	1	有	土師器-環・冠形壺・壺・壺	古墳時代 鬼高期
8	D21a	N-45.5°-E	長方形	4.54×3.69 16.8	26	無	2	0	1	有	土師器-環・冠形壺・壺・壺、土器-壺	古墳時代 鬼高期
9	D38a	N-58.3°-E	長方形	7.06×5.35 37.8	25	無	2	0	1	有	土師器-環・冠形壺・手把ね土器・鉢・小形壺・壺・壺、土玉、白土、磁石	古墳時代 鬼高期
10	E36a	N-30°-W (N-60°-E)	長方形	5.04×4.10 20.7	20	無	2	0	1	有	土師器-環・壺	古墳時代 鬼高期
11	F36a	N-48.4°-W (N-41.6°-E)	正方形	8.54×6.53 42.7	37	有	3	6	1	有	土師器-環・冠形壺・手把ね土器・壺	古墳時代 鬼高期
12	E21a	N-34.4°-W (N-55.6°-E)	長方形	6.59×5.00 33.0	38	無	2	0	1	有	土師器-環・冠形壺・壺・壺、土玉	古墳時代 鬼高期
13	F26a	N-57.2°-E (N-32.8°-W)	正方形	6.32×6.25 39.5	50	有	5	4	1	有	土師器-環・壺・壺・壺、勾玉、磁石	古墳時代 鬼高期
14	F31a	N-43.5°-W (N-46.5°-E)	長方形	7.48×5.42 40.5	40	無	3	0	1	有	土師器-環・冠形壺・壺	古墳時代 鬼高期
15	D15a	N-60.5°-E	隅丸長方形	2.86×2.25 6.4	40	無	2	0	1	有	土師器-環・壺	古墳時代 鬼高期

第13号住居跡の2軒だけであり、しかも第13号住居跡では断続的で明瞭なものでなかった。次に住居の特徴を項目ごとに記載する。

(1) 主柱穴について

主柱穴の検出された住居は、第1・2・11・13号住居跡の4軒だけで、このうち第1・11・13号住居跡の3軒は正方形である。第2号住居跡は長方形であるが、床面積が78.5㎡と大形の住居跡である。主柱穴は対角線上に4か所配置されており、第11号住居跡では、主柱穴の間に2ヶ所、主柱穴より小さい柱穴が掘られていた。

主柱穴の掘り方は直径30～40cm、深さが46～96cmほどで、直径32cm、深さ75cmほどのものが多く、ほぼ垂直に掘られていた。底面は平坦で硬くなっていた。

主柱穴の検出されない住居は、平面形が長方形で、形のゆがんだものが多い。主柱穴の検出されない住居で一番大きいのは、第9号住居跡で、主柱穴の検出されている住居で一番小さい住居の第13号住居跡よりも小さく、主柱穴の有無は住居の規模に関係していると思われる。

(2) 床面について

床面が広い範囲にわたって硬く締っていた住居は、第4号住居跡と第11号住居跡の2軒だけで、やや硬く締っていたのが第9・10・12号住居跡である。他の10軒の住居はやや軟弱であった。

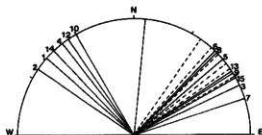
床面が部分的に硬く締っていた住居は5軒で、第3・14・15号住居跡は炉の近くが、第5号住居跡は南コーナー部が、第6号住居跡は南東壁ぎわが硬く締っていた。炉の近くや壁ぎわが硬く締っていたのは、その場所が生活の中心的な場所であったためと思われる。

(3) 炉について

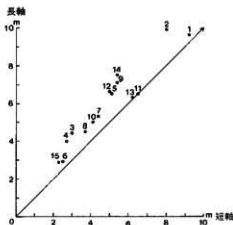
炉は15軒のいずれの住居にも設けられており、複数の炉が設けられていたのは9軒で、第13号住居跡には5基の炉が設けられていた。複数の炉を有する住居では、炉が同時に使用されたのではなく、順次に使用されたものと思われる。

また、如床の焼け具合が均一でないことから使用回数には差があったと思われる。

炉は床面に焼土が数センチメートル地積し



第118図 西原遺跡 住居跡長軸方向



第119図 西原遺跡 住居跡の規模

た状況で確認された。炉床が床面と同じレベルで掘り込みのない炉は、33基の炉のうち18基で、他の炉も掘り込みは2～10cmと浅く、使用前は掘り込みのない地床炉であったと思われる。

(4) 貯蔵穴について

貯蔵穴は、第4・6号住居跡の2軒を除いて設けられており、第2号住居跡には2基、他の住居には1基設けられている。貯蔵穴の位置は、第2号住居跡の2基の貯蔵穴のうちの1基を除きすべて住居のコーナー部に設けられており、13軒のうち10軒は東コーナー部に設けられている。

貯蔵穴の規模・形状などは、表10に記述した通りで、開口部は直径70cmほどの円形であるが、深くなるほど狭くなっていき、底部は直径25cmほどになる。深さは85cmと柱穴をまわり大きくしたものが多い。貯蔵穴を区画するような周境の設けられていたのは、第2・11・13号住居跡の3軒である。

貯蔵穴から完形または完形に近い土師器を出土する住居跡が5軒あった。第1号住居跡の貯蔵穴からは、壺形土師器の底部を欠損したものと、この下に完形の壺形土師器が重なって出土した。第5号住居跡の貯蔵穴からは、完形の短頸壺形土師器が出土し、第3・7・10号住居跡の貯蔵穴からはいずれも壺形土師器が出土している。

貯蔵穴の用途が判断できるような資料は得られなかったが、狭くて深い貯蔵穴が多いことから判断すると、生活の知恵として恒温で貯蔵するのが適している食物を貯蔵したものと推定される。

(5) 住居の構築材について

第11号住居跡と第13号住居跡の床面から出土した直径10cm以上の炭化材の樹種同定をバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼したところ、炭化材はクヌギである可能性が高いという結果を得た。このことから住居の構築材としては主にクヌギが使用されていたものと思われる。

遺存のよかった第11号住居跡の炭化材は、丸太状のものであることが認められた。また、直径5cmほどの丸太状の炭化材(PL71)には、幅4cm、深さ1cmほどの直角方向へのキザミが認められ丸太にキザミを入れて使用した好資料である。

表10 貯蔵穴一覧表

※単位はcm

住居跡番号	1	2	3	5	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
位置	南東コーナー	南コーナー	南西壁ぎわ	山コーナー	東コーナー	東コーナー	東コーナー	東コーナー	東コーナー	東コーナー	東コーナー	東コーナー	東コーナー	
開口部平面形	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	
開口部の長さ×短径	70	64×57	70	65×55	52	50	65×55	52×50	75×62	72×66	67	67×53	63×57	63×55
底部の長さ×短径	25	25×20	20	42×35	16	37×32	23	30×26	40	30×25	30	28×26	26×22	0
深さ	85	78	103	56	109	60	50	80	80	85	90	85	63	32
出土遺物	珪			珪	短頸壺	珪		珪						
備考		周境							周境		周境			

住居は大小様々であるが、いずれも貯蔵穴が設けられており、出土遺物の構成に顕著な差異を見出せないで、15軒の住居はほぼ同様な機能を有していたと思われる。住居の形状および構造は、和泉期の特徴を有しているものと思われる。

3 土師器の分類と住居跡の時期

(1) 土師器の分類

西原遺跡出土の土師器の特徴をつかむため、器形ごとに分類してみた。なお、3-1とあるのは、第3号住居跡出土遺物番号1を表し、土器解説表および実測図の番号と同じである。

環形土器

A類 体部が底部から大きく開きながら内彎して立ち上がる器高の低い環形土器のうち口縁部が直立または内傾するものを本類とする。底部の形状や稜の有無により、次の5種に細分される。なお、A類の環形土器は内・外面が赤彩されている。

A1類 底部は丸底で、口縁部に稜がなく器厚が全体に薄く、胎土は砂礫を含まず緻密であり、他の環形土器と比べ異質な感じを受ける土器を本類とする。内・外面はヘラミガキ調整され、外面の底部付近はヘラ削り調整されている。3-1・2の2点だけが出土している。

A2類 底部は丸底または丸底を平底風に削っており、口縁部に稜がなく、A1類に比べ厚手なつくりの土器を本類とする。外面は口縁部が弱い横ナデ、以下はヘラ削り調整されているが、浅口でケズリ痕の不明瞭なものが多い。内面はヘラミガキ調整され、一部に放射状に磨かれているものがある。

A3類 底部は平底で、他の器形はA2類に類似した土器を本類とする。底部の器厚が体部よりやや薄いものと、厚いものがある。調整方法はA2類と同じである。

A4類 底部は平底で、口縁部外面に段状の稜を有する土器を本類とする。調整方法はA2類と同じである。鬼高式の様相の強い土器で、9-5の1点だけが出土している。

B類 底部と体部はA類に類似しているが、口縁部はややくびれてから外反する土器を本類とする。底部の形状や稜の有無により次の3種に細分される。なお、B類の環形土器は内・外面が赤彩されている。

B1類 B類のうち、底部が丸底または丸底風平底の土器を本類とする。口縁部内面に弱い稜を有する。内面と外面の上位はヘラミガキ、外面の中位以下はヘラケズリ調整されている。

B2類 底部は丸底を削った平底で、外面は口縁部が横ナデ、以下はヘラ削り調整され、内面は口縁部が横ナデ、以下は放射状にヘラミガキ調整されている。鬼高式土器の様相を強くもつ土器で、9-6・7、10-5の3点が出土している。

B3類 B類のうち器厚の厚い平底を有する土器を本類とする。12-3、15-2の2点だけが出

土している。

C類 器形はB1類を大きくしたもので、椀形土器に類似した土器を本類とする。外面は口縁部が弱い横ナデ、体部がへら削り調整されている。内面は口縁部が弱い横ナデ、体部がへらナデまたはへらミガキ調整されている。内・外面は赤彩されている。

D類 体部は半球形で、器厚が厚く、口縁部は直立または内傾する土器を本類とする。外面は口縁部が弱い横ナデ、体部がナデまたはへら削り調整され、内面は口縁部が弱い横ナデ、体部がへらナデ調整されている。

E類 体部はD類に類似するが、口縁部は短く、口唇部がつままれ、尖って外反する土器を本類とする。口縁内・外面に稜をもち、和泉式土器の様相を強くもっている。底部の特徴で2種に分ける。

E1類 E類のうち丸底または丸底風平底の土器を本類とする。外面は口縁部が横ナデ、体部がへらナデまたはへら削り調整され、内面は口縁部が横ナデ、体部がへらナデ調整されている。

E2類 E類のうち平底の土器を本類とする。外面は口縁部が横位のへらミガキ、体部がへら削り調整され、内面は口縁部が横位のへらミガキ、体部がナデ調整されている。

卍形土器

口縁部の小片と体部の小片が合わせて3点出土しただけで、全体の器形は窺えない。

梨頸壺形土器

胴部は上位に最大径を有する球形で、口縁部は短く直立する。底部は丸底風の平底が多く、口縁部の器厚が胴部に比べ薄くなっている。口縁部は内・外面が弱い横ナデ調整、胴部は内面がナデまたはへらナデ調整、外面がへら削り調整されている。底部外面を除く全面が赤彩されている。

手捏ね土器

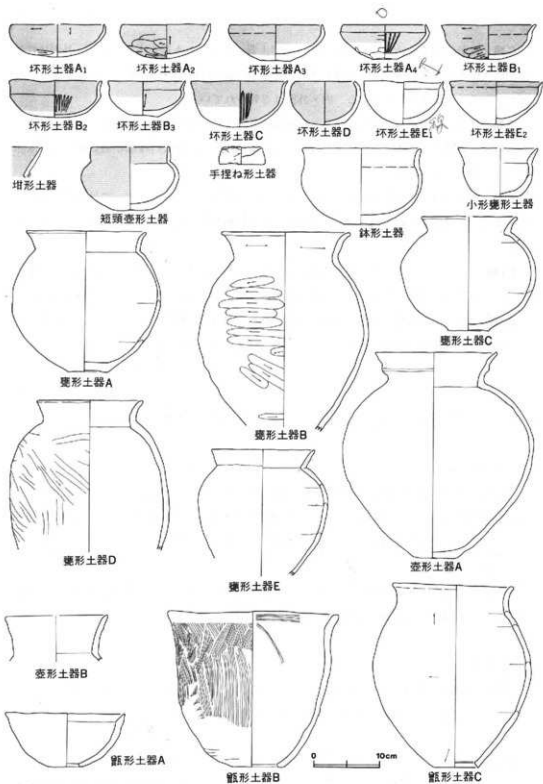
円盤の形に粘土の上部を指やへらでえぐり取った雑なつくりである。色調は黒褐色で、焼成も不良である。第9号住居跡と第11号住居跡の2軒だけから出土している。

鉢形土器

体部は底部から内彎しながら立ち上がり、口が大きく開いている。坏形土器を大きくした土器である。口縁部は内・外面が横ナデ調整、体部は内面がナデ、外面がへら削り調整されている。

小形袋形土器

体部は内彎しながら直立ぎみに立ち上がり、上位で最大径となっていく。口縁部は外傾し、



第120回 西原遺跡土器分類

表11 住居内出土遺物器種別一覧表

遺物名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
14形土器 A1			2(1)													2(1)
14形土器 A2	2		*4(2)				2(1)	3(3)	△4(3)	□2(1)	△1	1		1(1)		20(20)
15形土器 A3			*1(1)							2(2)		1(1)			*△1(1)	5(5)
16形土器 A4									△1(1)							1(1)
16形土器 B1	*3(1)	3(1)	9(6)													15(8)
16形土器 B2									2(2)	△1						3(2)
16形土器 B3															*1(1)	1(1)
16形土器 C		1			1		1(1)		△7(6)		1(1)			1(1)		12(9)
16形土器 D							1(1)		*3(3)	1(1)			*1(1)			6(6)
16形土器 E1	1(1)			*1					6(5)		4(1)					12(7)
16形土器 E2							1(1)									1(1)
埋形土器		1	*1	1												3
短筒形土器	*2	1	*4(1)		*4(4)			1(1)	1(1)		1(1)	1(1)		*2(2)		17(10)
手押形土器									7(7)			2(2)				9(9)
鉢形土器	*1	*1	1						1							4
小形袋形土器									3							3
袋形土器 A			*4(3)				1(1)		1(1)						1	7(5)
袋形土器 B	1		*1(1)				2(2)	*1	1		2	*1	*2(1)		*2(1)	13(9)
袋形土器 C			*4(2)				1	*1	△4	1						11(9)
袋形土器 D							*1	*1	*△4(1)	*△5			*1			12(1)
袋形土器 E		2					*2(1)	*3	2			2				11(1)
袋形土器その他 F	*△5(1)	1	1(1)	1	1	2		1				3			*1	16(20)
瓶形土器 A			*1					1(1)	*1(1)							3(2)
瓶形土器 B												*1	△1(1)			2(1)
瓶形土器 C			*3(2)				*1	1	2(1)							7(3)
壺形土器 A									1			1(1)				2(1)
壺形土器 B						1						1				2
須臾器	2	1	2(2)			2		1								8(2)
土 瓦	2	28			7	1			10			1				49
石製埋道具	灰孔四角		3	3												6
	与玉					1			2			1				4
	円玉	3							1							4
	特殊平								1							1
砥石		1						3				1				5

凡例 ()内は完形または80%以上復元できた土器の数

- 胎土に黒色砂を含む土器
- △ ハケ目調整が認められる土器
- 内面に放射線状のミガキが認められる土器

頸部内面に稜を有する。底部は平底である。口縁部は内・外面が横ナデ調整、胴部は内面がへらナデ、外面がへら削り調整されている。第9号住居跡から3点出土しているだけで、9-24の内面は黒色処理されている。鬼高式土器の様相を強くもった土器である。

変形土器

A類 胴部はほぼ球形で、口縁部は直立ぎみに立ち上がる土器を本類とする。器厚がやや薄く、胴部の外面がナデ調整されている。和泉式土器の様相を強くもっている。

B類 胴部はほぼ球形で、口縁部は外反する土器を本類とする。器厚が厚く、胴部の外面はへら削り調整されている。

C類 胴部は横に長い球形の土器を本類とする。器厚が厚く、胴部の外面はへら削り調整されている。

D類 胴部はやや長胴で、口縁部は直立ぎみに立ち上がる土器を本類とする。器厚は厚く、胴部の外面はへら削りまたはハケ目調整されている。鬼高式土器の様相を強くもっている。

E類 口縁部は頸部でくの字に屈曲し外傾している土器を本類とする。

F類 A～E類にあてはまらない変形土器を本類とする。

瓶形土器

A類 頸部でくびれがない、鉢形を呈した小形で孔が小さい瓶形土器を本類とする。和泉式土器の様相を強くもっている。

B類 器形はA類に類似しているが、大形で孔が大きい瓶形土器を本類とする。第12・13号住居跡の2軒から出土している胴部の外面は13-5がハケ目調整、12-10がへら削り調整されている。鬼高式土器の様相を強くもっている。

C類 変形の大型の瓶形土器を本類とする。口縁部は内・外面が横ナデ、胴部は内面がナデ、外面が上位をナデ、下位をへら削り調整されている。雑なつくりである。鬼高式土器の様相を強くもっている。

壺形土器

A類 口縁部の中間につき足しによる屈曲が認められる壺形土器を本類とする。胴部は球形で、大形である。口縁部は内面がナデ、外面が横ナデ、胴部は内面がナデ、外面がへら削り調整されている。

B類 A類の他の壺形土器を本類とする。口縁部は長く外傾している。口縁部とか胴部片だけの出上で全体の器形を窺えない。

(2) 住居跡の時期

住居跡出土の土師器は和泉式と鬼高式の様相をとともにもっており、その中で和泉式の様相の強い土師器には、環形土器E1類、甕形土器A・E類、甕形土器A類などがある。鬼高式の様相の強い土師器には、環形土器A4・B2類、手捏ね土器、小形甕形土器、甕形土器B・D類、甕形土器B・C類などがある。特に環形土器A4・B2類は口縁部外面に稜を有するとともに、体部内面が放射状にヘラミガキ調整されており、須恵器模倣の環形土器に類似している。また、甕形土器B・C類は大形の甕形土器で鬼高式土器としてのメルクマルになると思われる。

表11は、分類した土器を遺構別にまとめたものである。和泉式の様相の強い土器と鬼高式の様相の強い土器は同一遺構からも出土しており、遺物の使用された時期に大きな差異はないと思われる。従って当該遺跡出土の土師器は、和泉式から鬼高式へ変容する過程にあったと思われる。

第3号住居跡から出土した須恵器(3-37・38)は、胎土分析によると大阪陶器窯跡で生産された可能性が高く、陶色の幅年と対比すると、高蔵23号窯跡(TK-23)出土須恵器と類似点が多く認められた。TK-23は5世紀末頃に比定されており、3-37・38は5世紀末の製品と思われる。

住居跡の時期は、須恵器から5世紀末頃で、和泉期から鬼高期へ変容する過程にあった時期と思われる。

4 第3号住居跡と第9号住居跡の性格について

第3号住居跡は、長方形を呈し、形態も他の住居と変わっていないが、第9号住居跡とともに特異な性格をもっている。すなわち遺物が表11からもわかるように他の住居と比べ群を抜いて多く出土し、多くの類型の土器がそろっており、しかも完形で復元された須恵器も出土している。また、その土器の量は1軒の住居の所有物としては多すぎると思われる。環形土器などの小形の土器は完形で出土したのに対し、甕形土器などの大形土器は、第72図からもわかるように割れて広範囲に散らばって出土したにもかかわらず、三次焼成をうけた土器が完形に近く復元できた。これらのことから、本跡では他の住居の土器などが集められ、一度に破砕する行為が行われ、土器の破砕行為の後に家屋の焼却が行われたものと想定される。また、柴ぎわから、石製模造品の双孔円板が3点かたまて出土しており、本跡は、これらの遺物の出土状況から祭祀的な行為が行われた場所ではないかと思われる。

第9号住居跡は、長方形を呈し、形態も別に他の住居と変わっていないが、出土遺物の量や三次焼成された土器などの点で第3号住居跡に類似し、さらに次のような点で、祭祀との関連性が考えられる。下半を欠損した甕形土器が8点炉付近に置かれ、口縁方向を上にした甕形土器の中には土が堆積していた。祭祀用具と思われる石製模造品が、勾玉、白玉、紡錘車と器種が多く出土している。手捏ね土器7点も勾玉とともに出土している。

第9号住居跡は、これらの遺物の出土状況などから、祭祀的な儀式が行われた後に、土器の廃棄と家屋の焼却が行われたものではないかと思われる。

第3号住居跡と第9号住居跡は住居の規模と出土遺物などに差異が認められるが、いずれの住居も祭祀行為に伴った遺物の廃棄と家屋の焼却が行われてたものと考えられる。

5 西原遺跡の性格

当遺跡から15軒の住居跡と4軒の土坑が検出されたが、それらの時期は出土遺物から5世紀末頃と思われる。

住居の形態から見ると、5世紀末の千葉・埼玉の両県では、鬼高式土器の出現に伴って住居構造に変化がおき、従来よりも整った方形を呈した住居が主体となり、竪に変わって北壁にカマドが設置されるようになってきていた。それに対し、当遺跡の住居は従来からの和泉期の特徴を強く残しており、平面形は長方形を呈し、規模は大小様々で、竪は中央から壁ぎわへ寄った位置に1基又は複数設けられている。

第3号住居跡と第9号住居跡からは、祭祀的な用具とされている石製模造品の白土、双孔円板が出土している。これらの遺物は、県内の古墳時代和泉期の住居跡から出土している例が多く、本跡においても和泉期の生活習慣が引き継ぎ行なわれていたものと思われる。

当遺跡出土の土師器は、和泉式土器の名残りをのこし鬼高式土器の様相をもつものであり、和泉期から鬼高期へ変容する過渡期的なものと思われる。

また、第3号住居跡をはじめ5軒の住居跡から5世紀末に比定される須恵器が出土しているが、この須恵器は、和泉期の遺構からの出土例は少なく、本県および近県での住居内出土遺物としては最古のものと考えられる。須恵器は、大阪の陶色で製作されたと思われることから、当地に中央の文化が流入していたことを物語っている。

これらのことから、当遺跡においては、鬼高期の文化の受容が千葉・埼玉を經由して、緩やかに伝えられたものと思われる。

当遺跡における集落は、個々の住居跡間の出土遺物には時期差が若干認められることから、数軒を単位とする小集落が継続的に形成されたものと思われる。

これらの集落の生活基盤は、集落の南側に入り込んでいる谷津田での水田耕作であり、その他住居内にドングリやモモ、ヒシの実などの炭化物^③が検出されたことから、自然の物も大事な食料であったと思われる。

注 ① 炭化材の同定結果については、附章に記した。

② 須恵器の胎土分析については、附章に記した。

③ 炭化物の同定結果については、附章に記した。

終章むすび

水海道都市計画事業・内守谷上地区西整備事業地内における奥山A遺跡・奥山B遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡・奥山下根遺跡の発掘調査は、昭和58年度から当教育財団によって実施され、昭和60年度の奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡の整理業務をもって、全て終了の運びとなった。

奥山A遺跡は、台地の東側縁辺部に竪穴住居跡3軒が検出され、弥生時代から古墳時代へ移行する時期の1単位の集落で構成されていた。住居内から古墳時代の五領式土器に弥生時代の前野町式土器が伴って出土しており、弥生時代から古墳時代へ移行する時期の土器を考える上で貴重な資料となった。また、当地が遺構と遺物からも、弥生町・前野町式文化圏の影響を強く受けていたことが判明した。

奥山C遺跡は、台地突端部に縄文時代早期中葉の三戸期を中心とする時期の集石15基、同期後葉の鶴ヶ島台期を中心とする炉穴6基が検出された。遺構外遺物として、井草式・稲荷台式・三戸式・田戸上層式・野島式・鶴ヶ島台式・茅山式の縄文時代早期の前葉から後葉にかけての縄文土器片が出土した。特に三戸式と鶴ヶ島台式の土器片が特に多く出土し、この時期が当遺跡の盛期であったと思われる。集石の性格については、解明できなかったが多くの類別と十分に比較検討することで解決を図っていきたい。

西原遺跡は、台地の平坦部から縁辺部に向け竪穴住居跡が15軒検出された。住居跡は炉の設けられた斉一性のない住居で和泉期の伝統を色濃くのこしているが、出土した土師器は和泉式から鬼高式への移行期のもので、鬼高式土器の様相をもつ土器と和泉式の様相をもつ土器が出土し、当遺跡は和泉期から鬼高期へ、徐々に移行していったことを窺わせた。当遺跡からは、大阪陶器で焼かれた須恵器も出土し、当遺跡の時期は5世紀末頃であることが判明し、和泉期と鬼高期を両する時期を判定するのによい資料となった。第3号住居跡と第9号住居跡については、祭祀の行われた遺構とも思われるが、今後多くの類別を収集し、十分に比較検討していきたい。また、15軒の住居の中には、出土遺物に若干の時期差が認められるので、時期区分とグループ分けを今後の課題としたい。

なお、この報告書をまとめるにあたって、関係各位から御指導、御協力をいただいたことに対し、心から感謝の意を表したい。

附 章 自然科学的分析

1 西原遺跡出土初期須恵器の胎土分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

西原遺跡から出土した、5世紀末に比定された2点の須恵器を蛍光X線分析法によって分析した。ただし、2点とも完形品であるので、非破壊分析を行った。

非破壊分析で須恵器の化学特性を求める一つの方法はFe/Ti、Rb/Srという工合にピーク面積比をとることである。この比は試料の形や大きさに無関係に一定するからである。しかし、筆者はここで一つの新しい方法を採用してみた。すなわち、筆者の長年にわたる全国の窯跡出土須恵器の分析結果から、Ti量は全国的にみて殆んど差違がないことが分かった。したがって、非破壊分析で須恵器の化学特性を調べる場合には、Fe/Ti、Rb/Ti、Sr/Tiの比をとれば、Fe、Rb、Sr量が多い須恵器には、これらの比も各々、大きくなり、化学特性を決定することができるはずである。そこで、筆者が破壊分析でよく使用するRb-Sr分布図の代わりに、非破壊分析のRb/Ti-Sr/Ti分布図をとってみることにした。

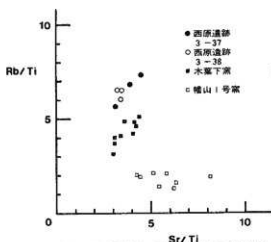
図1には、地元、茨城県内の窯跡出土須恵器のRb/Ti-Sr/Ti分布図を示す。幡山1号窯の須恵器にはRb量が少なく、Sr量が多い。このため、Rb/Ti-Sr/Ti分布図でも、水戸市内の木葉下窯跡の須恵器とは相互識別できることが分かる。また、図1には、西原遺跡の2点の須恵器の分析結果も示してある。表面に自然灰釉が付着していないところをねらって、各々、3ヶ所にX線を照射した。その結果、3-37と3-38の須恵器は化学特性がきわめて類似していることが分かった。つまり、この2点の完形品は同一産地の製品である。勿論、この2点は地元の窯跡出土須恵器には対応しない。5世紀末には、まだ、地元には須恵器窯跡がないことから、これは当然である。

5世紀代の須恵器生産の中心は大阪陶邑であったといわれる。そこで、大阪陶邑産須恵器のRb/Ti-Sr/Ti分布図を図2に描いてみた。大阪陶邑産須恵器としてはTK-73、TK-87、TK-306、TG-22、TK-85、ON-22-II窯出土須恵器が分析された。これらの窯跡出土須恵器の間には、化学特性の差違は殆んど認められなかった。つまり、大阪陶邑産須恵器はどの窯跡出土須恵器も同じ化学特性をもっているとみなせることが分かる。これらの全点を包含するようにして、大阪陶邑領域をとってある。そうすると、西原遺跡の3-37・3-38の2点の須恵器は大阪陶邑領域にぴったり対応することが分かった。

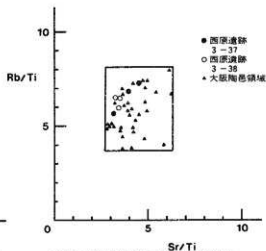
ここで一つ問題がある。5世紀末から、東日本の遺跡への須恵器供給源として、名古屋の猿投

窯跡が考えられるからである。そこで、東山11号、東山2号、東山名大1号窯の須恵器のRb/Ti-Sr/Ti分布図を図3に示す。そうすると、これらの須恵器は大阪陶色領域から少しずれて分布することが分かる。さらに、西原遺跡の2点の須恵器の分布位置も猿投窯跡の須恵器とはずれていることも明白である。したがって、西原遺跡の2点の須恵器は猿投窯産とはいえないことが分かった。

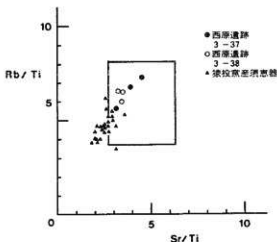
以上の結果、西原遺跡出土の2点の須恵器の産地は大阪陶色がきわめて有力であると推定できる。



第1図 茨城県窯跡出土須恵器のRb/Ti-Sr/Ti分布図



第2図 大阪陶色産須恵器のRb/Ti-Sr/Ti分布図



第3図 猿投窯産須恵器のRb/Ti-Sr/Ti分布図

2 奥山A遺跡出土試料 炭化材同定報告について

(財)茨城県教育財団

奥山A遺跡出土試料 炭化材同定報告

貴、(財)茨城県教育財団様より御依頼のありました、奥山A遺跡試料の炭化材同定が終了しましたので、結果を御報告致します。

バリノ・サーヴェイ株式会社

昭和60年8月27日

1 試料

試料は、古墳時代前期のものとしてされる2号竪穴住居より検出された炭化材 (No.1) 1点である。

2 方法

試料を乾燥 (60℃ 15時間) させたのち、木口・柱目・板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版 (P.L.72) も作成した。

3 結果

試料は、*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. [コナラ属(コナラ連属コナラ節)の一種] と同定された。その主な解剖学的特徴は次のようなものである。

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁厚は中庸で、横断面では円形~楕円形、小道管は管壁は中庸~薄く、横断面では多角形、ともに単独。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと、複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は、落葉ナラ類 (= subgen. *Lepidobalanus*) の中で、果実 (いわゆるドングリ) が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica*) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ (*Q. serrata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*)、カシワ (*Q. dentata*) といくつかの変種を含む。モンゴリナラは、北海道・本州 (丹波以北) に、ミズナラ・カシワは、北海道・本州・四国・九州に、コナラは北海道 (南部)・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州 (岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。このうち、関東地方平野部で普通に見られるのはコナラであり、本試料もコナラである可能性が高い。コナラは、樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・構材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

3 西原遺跡出土試料種子及び材同定報告について

(財)茨城県教育財団
西原遺跡出土試料
種子及び材同定報告

貴、(財)茨城県教育財団殿より御依頼のありました、西原遺跡試料の種子及び材同定が終了しましたので、下記の通り結果を御報告致します。

記

- | | |
|--------|-----------|
| 1 種子同定 | P 242 |
| 2 材同定 | P 242～243 |

バリノ・サーヴェイ株式会社

昭和60年 8 月27日

1 種子同定

1-1 試料

試料は、古墳時代後期前葉のものとされる11号住居跡より検出された炭化物で、No.4～6の3点（3ケース）である。

1-2 結果

同定結果と個体数を一覧表で示す（表1）。

表1 同定結果

試料番号	種名	個体数
4	<i>Quercus acutissima</i> (クヌギ)	4
5	<i>Quercus</i> sp. * (コナラ属の一種)	3
6	<i>Prunus persica</i> (モモ)	1

*：コナラ属のうち、コナラ亜属（ナラ類）・アカガシ亜属（カシ類）のいずれに属するものか判断できない。また、*Castanopsis*（シイノキ属）である可能性も否定できない。

同時に、試料の拡大写真図版（P.L73）も作成した。

2 炭化材同定

2-1 試料

試料は、古墳時代後期前葉のものとされる11号住居跡（No.1・3）と13号住居跡（No.2）から検出された炭化材3点である。

2-2 方法

試料を乾燥（60℃ 15時間）させたのち、木口・柾目・板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（P.L74～76）も作成した。

2-3 結果

同定結果を一覧表で示す（表2）。

表2 同定結果

試料番号	種名
1	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) sp. [コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種]
2	<i>Quercus</i> (subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) sp.
3	<i>Rhus javanica</i> (ヌルデ)

次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などについて種類ごとに述べる。

・*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. アナ科 No. 1, 2

環孔材で孔部は1~4列、孔間外で急激に管径を減ずる。大道管は管壁は厚く横断面では円形、小道管は管壁は中層~厚く横断面では角張った円形、ともに単独。道管は単穿孔を有し、壁孔を交互状に配列、放射組織との間では櫛状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、落葉ナラ類(コナラ亜属)の中で、果実(ドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ(*Quercus acutissima*)とアベマキ(*Q. variabilis*)の2種が含まれる。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両種を区別することはできないが、現在の自然分布からみて、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは、樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くより薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多かった。黒炭で知られる佐倉炭・池田炭も本種で作られ、薪炭材としては国産材中第一の重用材である。このほかに器具材・枕材・楳木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

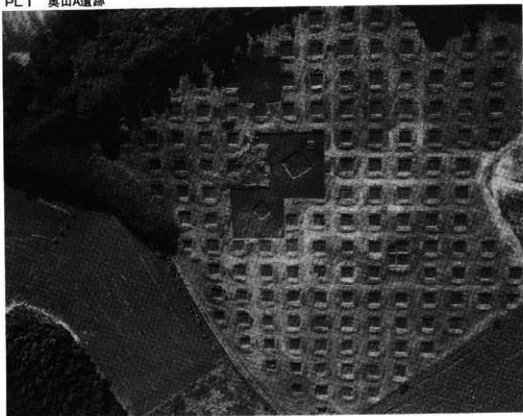
・*Rhus javanica* ウルシ科 No. 3

試料は当年板で、散孔状を示すが、環孔材と考えられる。早材部道管は、横断面ではやや角張った楕円形で、単独、晩材部へ向かって管径を漸減させ、年輪界付近では塊状となる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性II~I型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

ヌルデは北海道(石狩以南)~琉球の山野に普通に見られる落葉小高木である。材は軽軟~中程度で加工は容易、耐朽性は大きい。器具材や旋作・薪炭材として用いられるほか、枕や浮子としての用途も知られる。樹皮は染料に、また葉にできる虫えい(=五倍子)はタンニン原料となる。

写 真 图 版

PL 1 奥山A遺跡

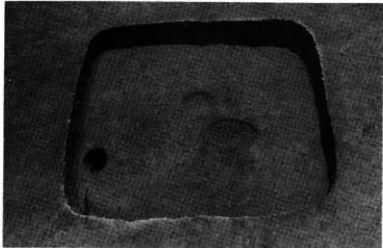


遺跡全景



第1号・第2号住居跡

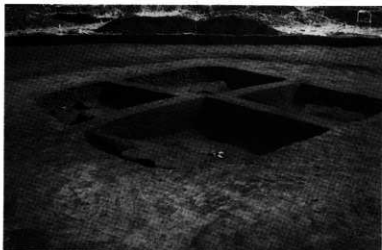
PL 2 奥山A遺跡



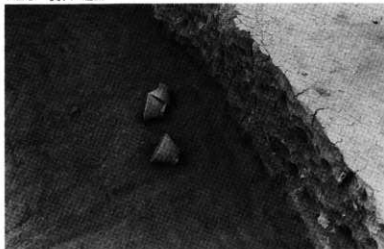
第1号住居跡



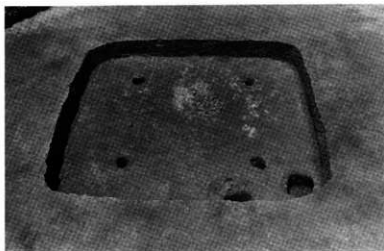
第1号住居跡
遺構確認



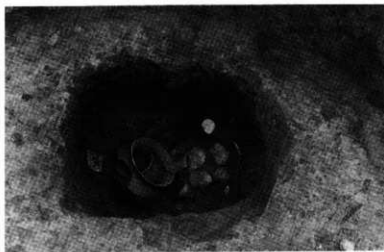
第1号住居跡
土層



第1号住居跡
遺物出土状況

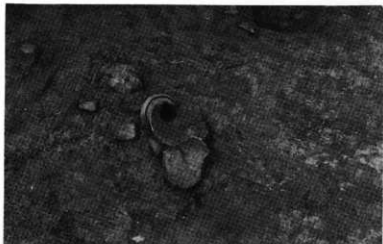


第2号住居跡



第2号住居跡
遺物出土状況

PL 4 奥山A遺跡



第2号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
遺物出土状況



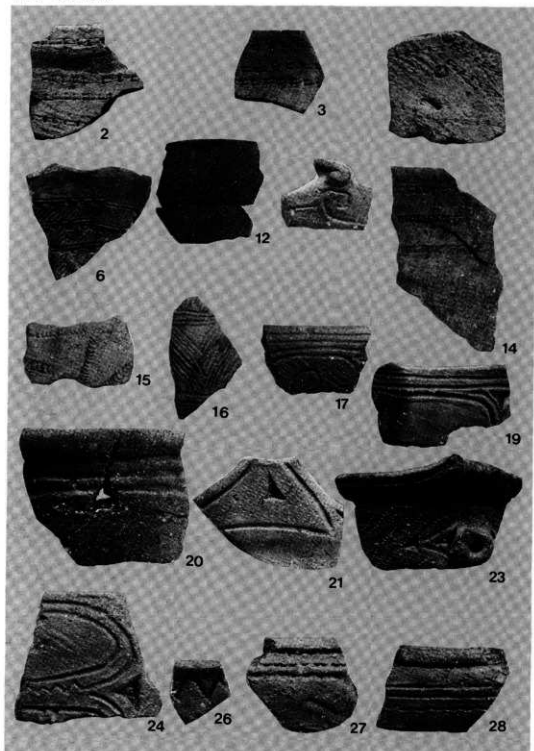
第2号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡

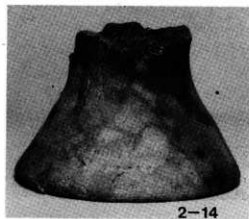
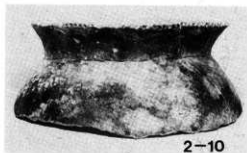
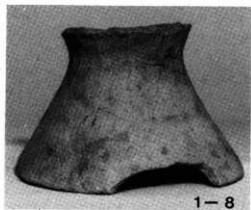
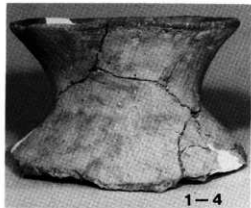


第3号住居跡
遺物出土状況

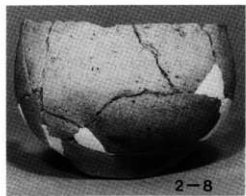
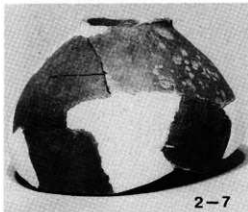
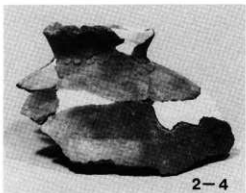
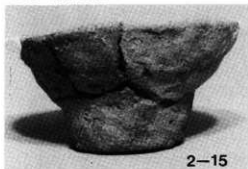


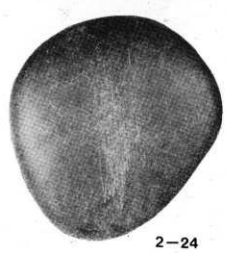
縄文時代前期～中期土器片

PL 7 奥山A遺跡



第1・2号住居跡出土遺物





第1・2号住居跡出土遺物, 遺構外出土土器



遺跡全景

PL11 奥山C遺跡



第2号集石



第3号集石



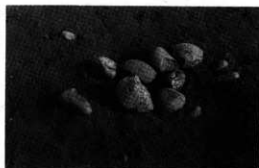
第5号集石



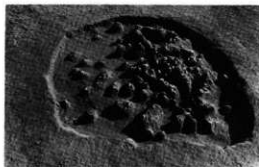
第7号集石



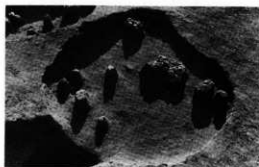
第8号集石



第9号集石



第12号集石

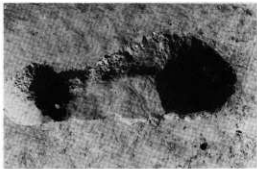


第13号集石

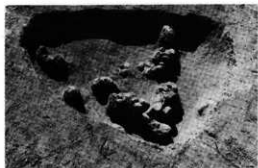
PL12 奥山C遺跡



第2号土坑



第22号土坑



第25号土坑遺物出土状況



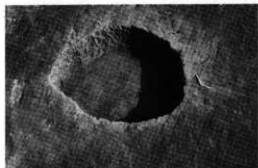
第33号土坑



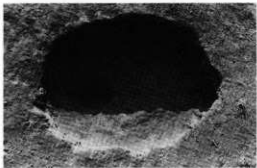
第34号土坑遺物出土状況



第35号土坑

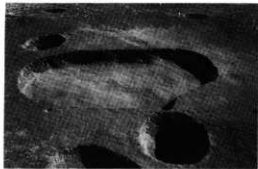


第41号土坑

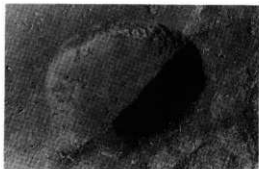


第43号土坑

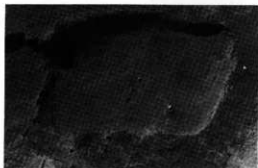
PL13 奥山C遺跡



第45号土坑



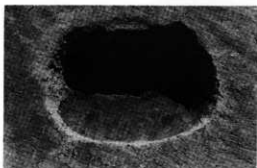
第61号土坑



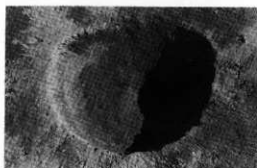
第63号土坑



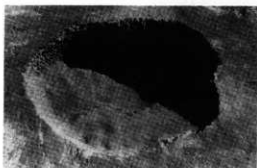
第64号土坑



第71号土坑



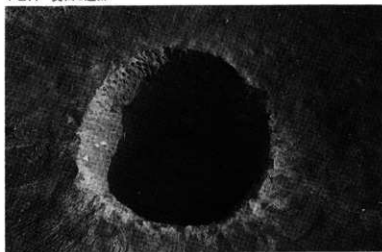
第72号土坑



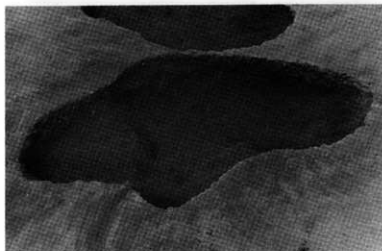
第75号土坑



第77号土坑



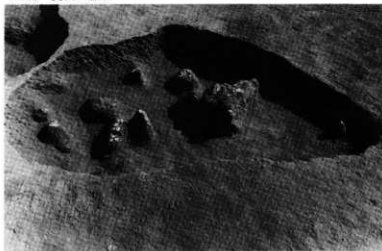
第2号炉穴



第3号炉穴



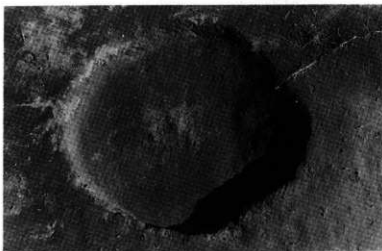
第3号炉穴
遺物出土状況



第4号炉穴
遺物出土状況



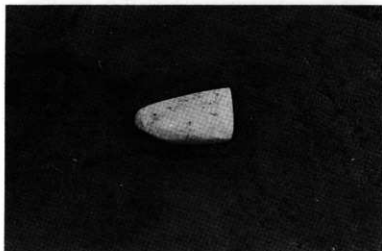
第5号炉穴
遺物出土状況



第6号炉穴



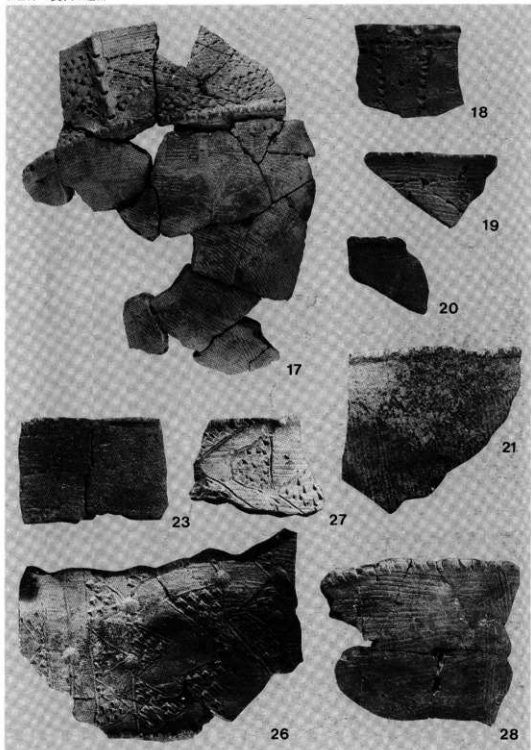
第13号集石
遺物出土状況



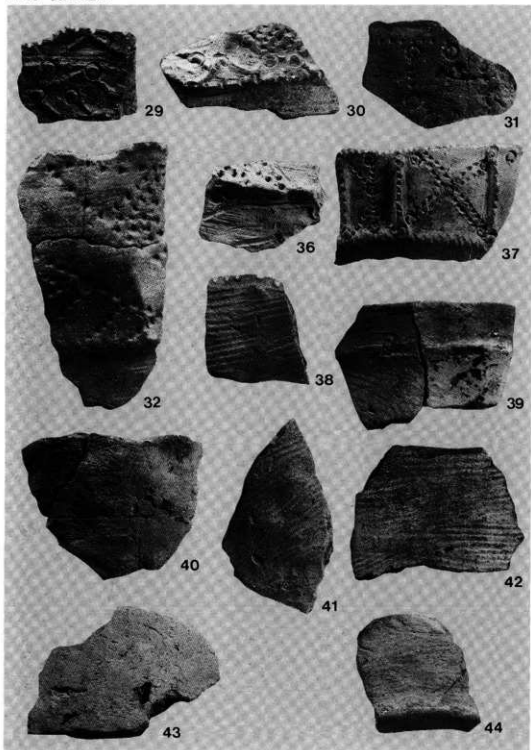
片刃磨製石片
出土状況



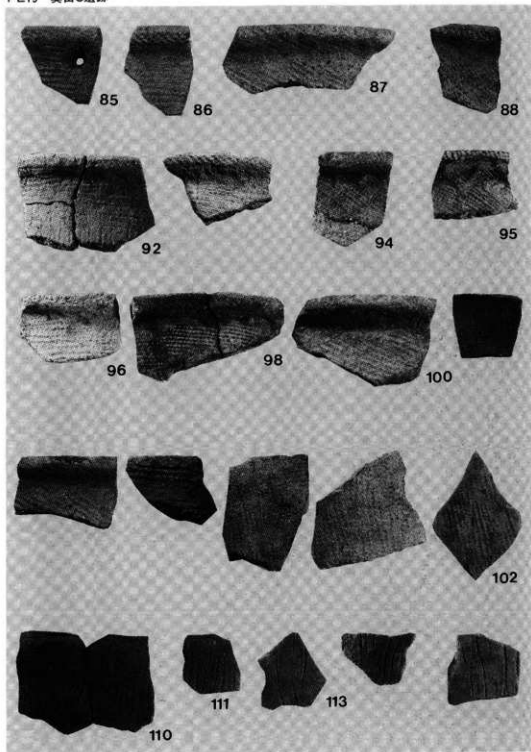
土器尖底部
出土状況
D1d9



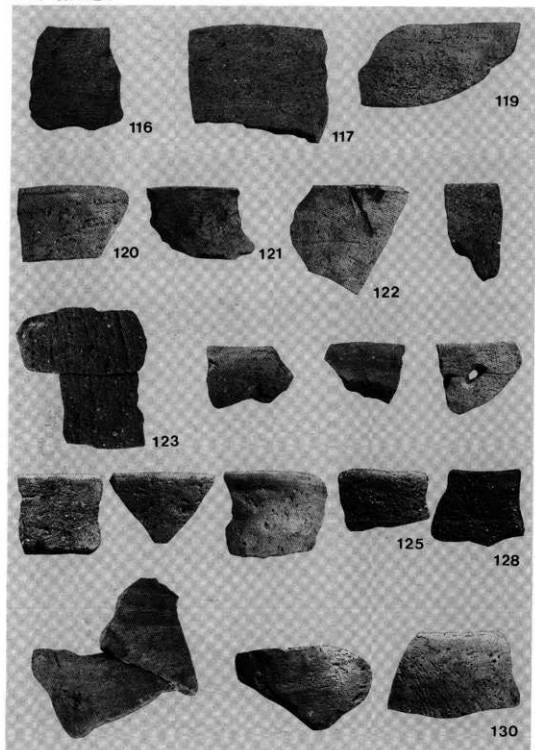
第4号炉穴出土土器片



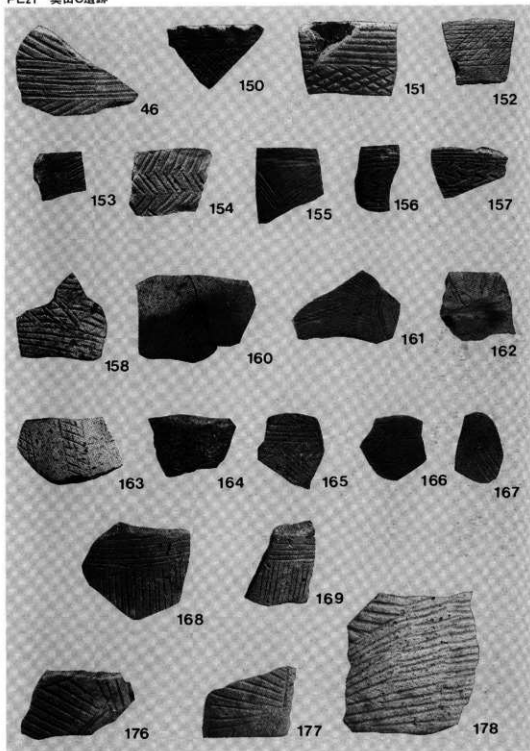
第5号炉穴出土土器片



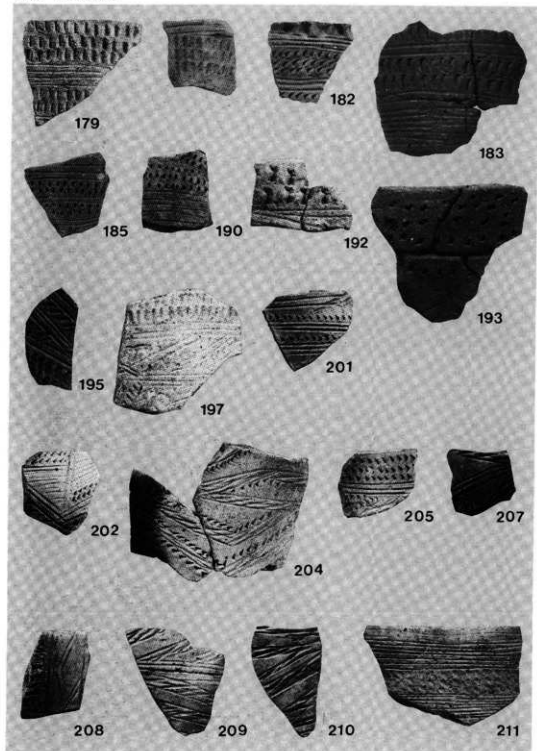
縄文時代早期熱糸文系土器片



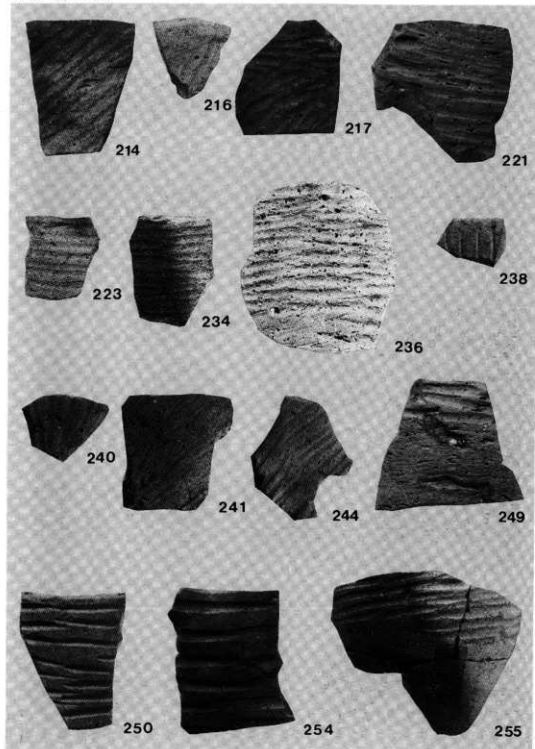
縄文時代早期無文土器片



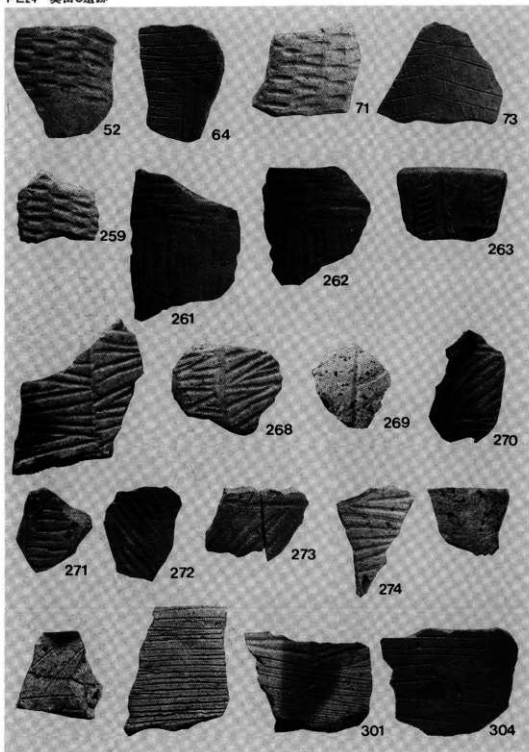
縄文時代早期沈線文系土器片(1)



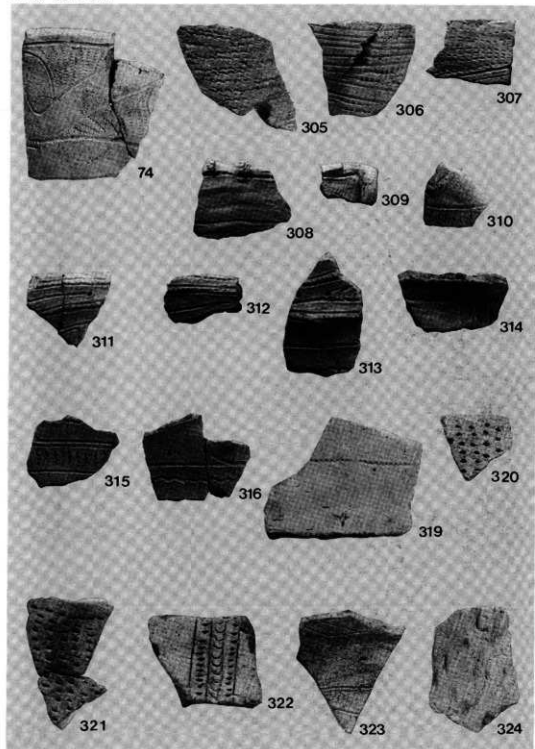
縄文時代早期沈線文系土器片(2)



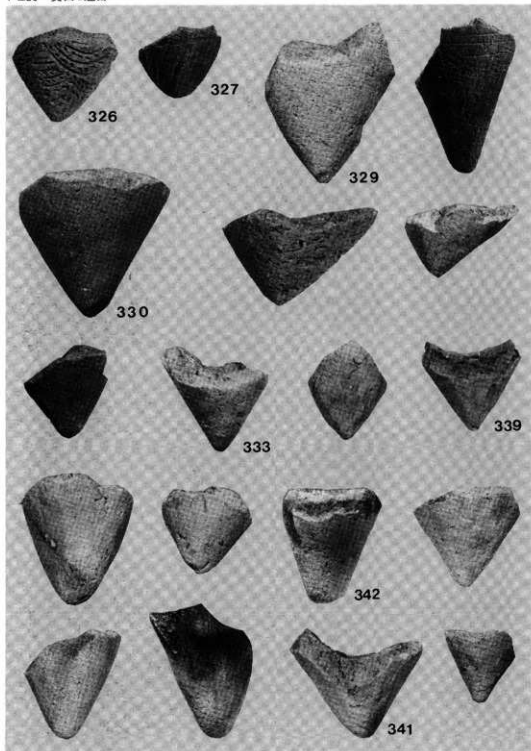
縄文時代早期沈線文系土器片(3)



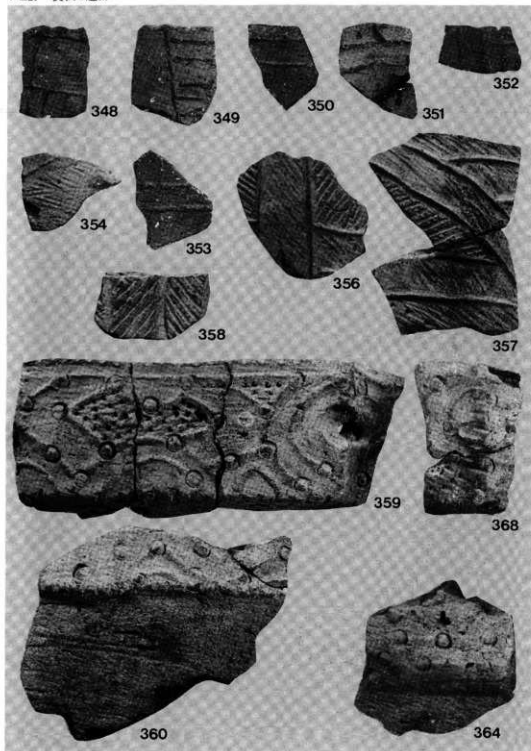
縄文時代早期沈線文系土器片(4)



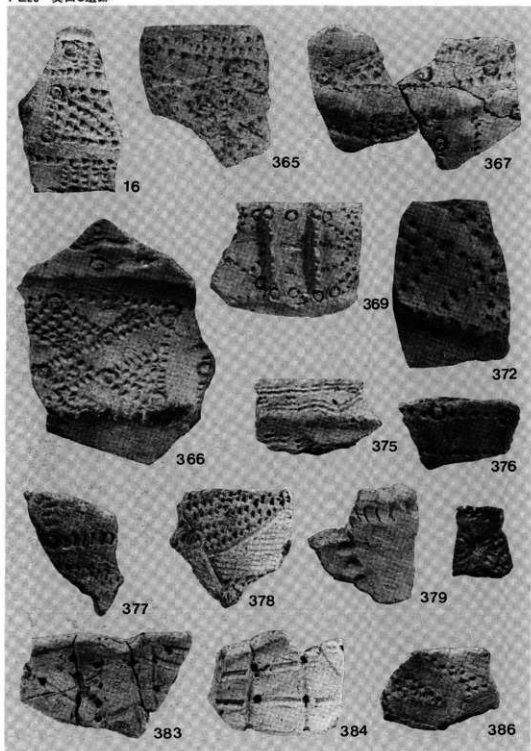
縄文時代早期沈線文系土器片(5)



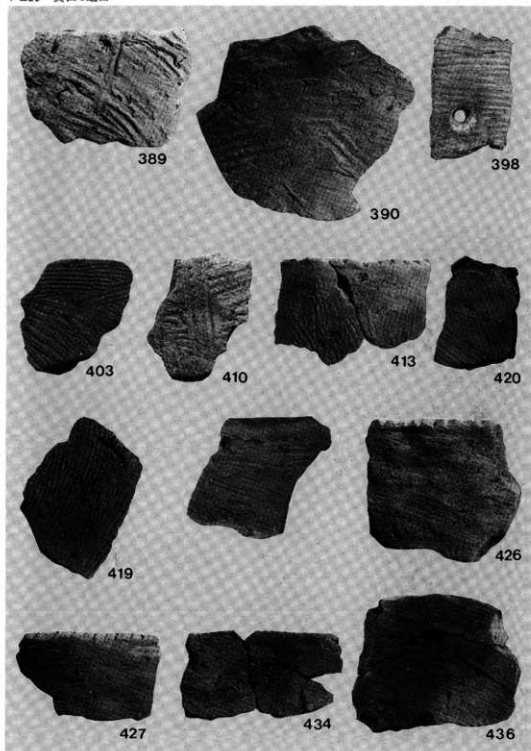
縄文時代早期沈線文系土器底部片



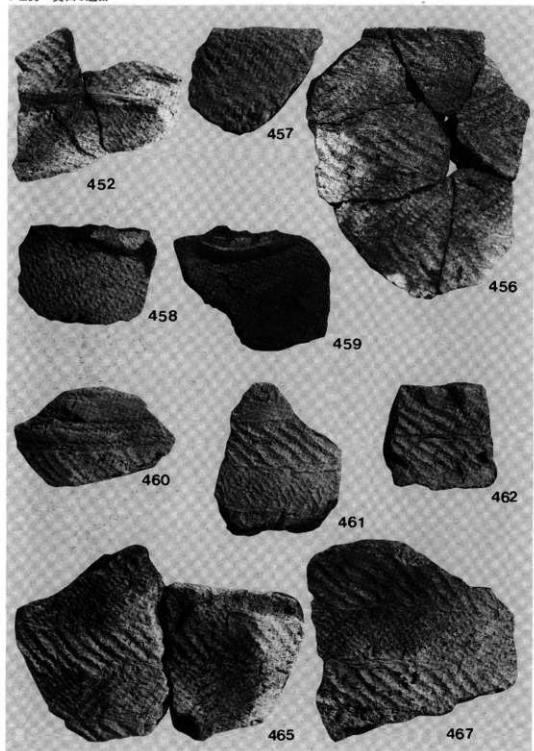
縄文時代早期条痕文系土器片(1)



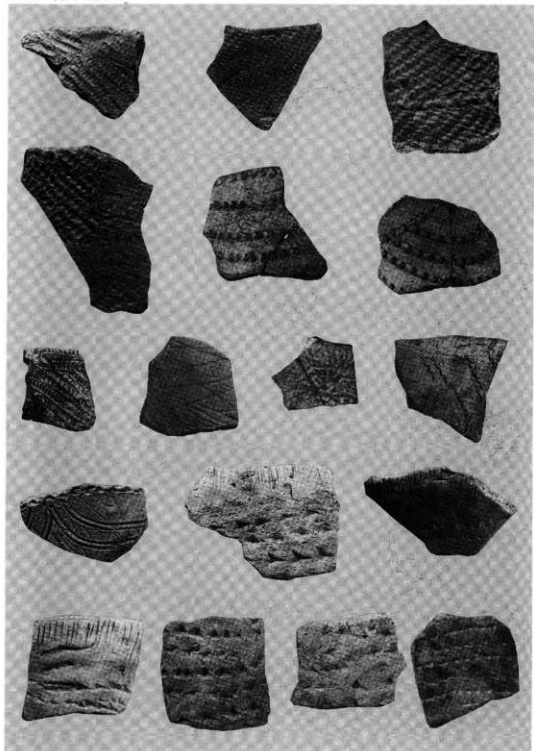
縄文時代早期条痕文系土器片(2)



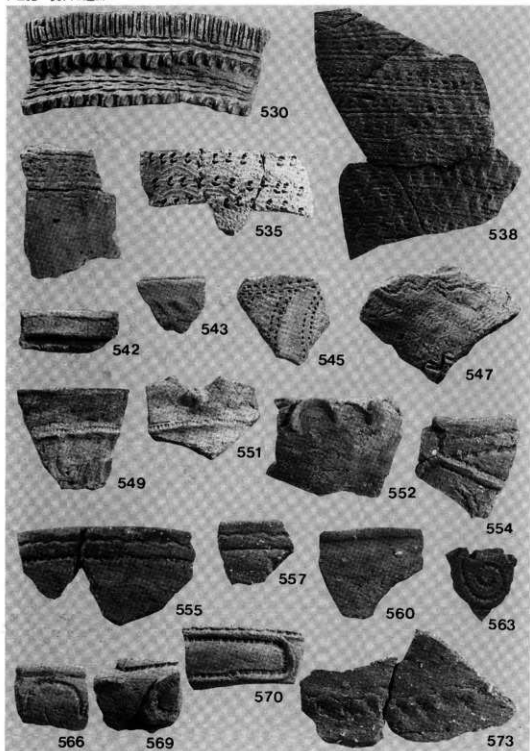
縄文時代早期条痕文系土器片(3)



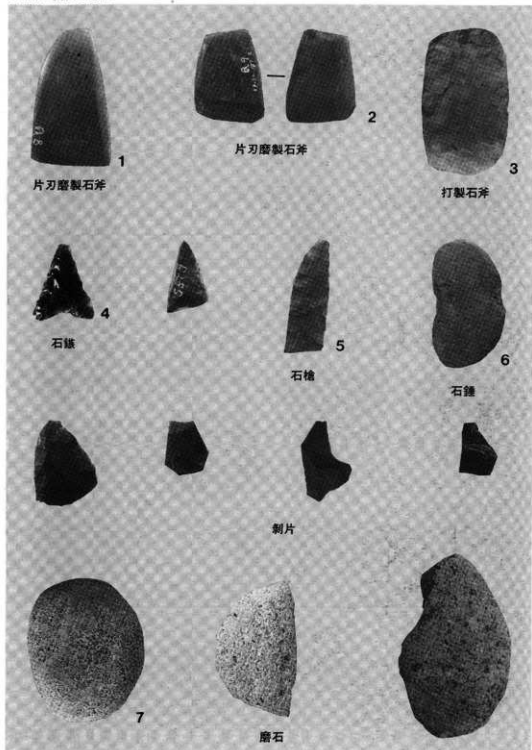
縄文時代前期土器片(1)

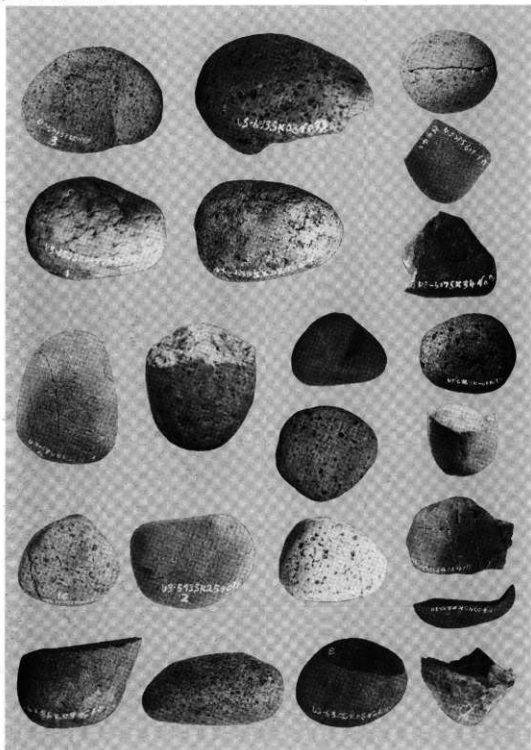


縄文時代前期土器片(2)



縄文時代前期・中期土器片





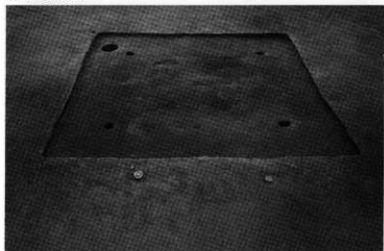


遺跡全景

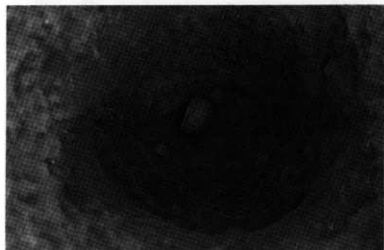
PL36 西原遺跡



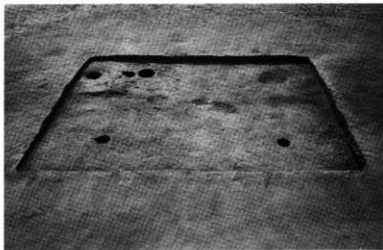
遺構確認状況



第1号住居跡



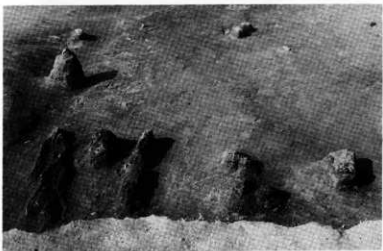
第1号住居跡
貯藏穴内
遺物出土状況



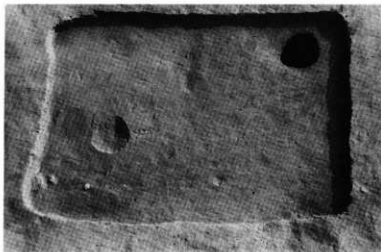
第2号住居跡



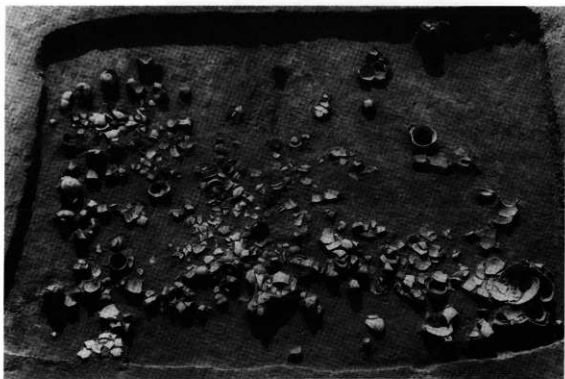
第2号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡



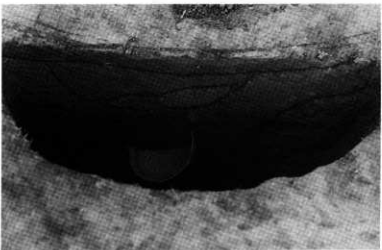
第3号住居跡 遺物出土状況



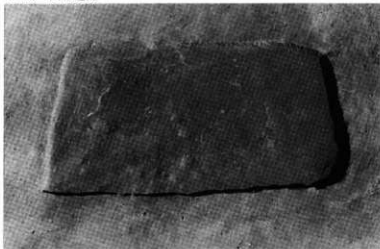
第3号住居跡
遺物出土状況



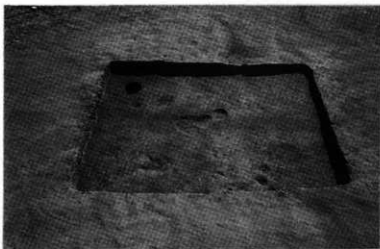
第3号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
貯藏穴土層



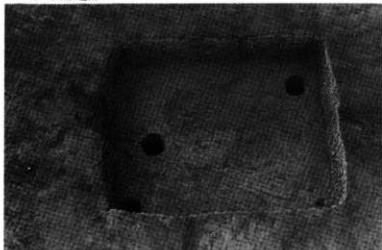
第4号住居跡



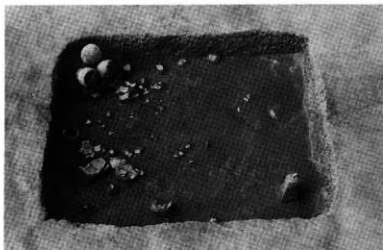
第5号住居跡



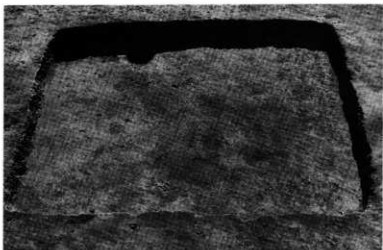
第5号住居跡
遺物出土状況



第6号住居跡



第6号住居跡
遺物出土状況



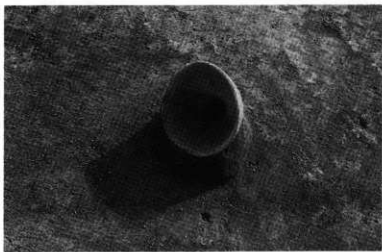
第7号住居跡



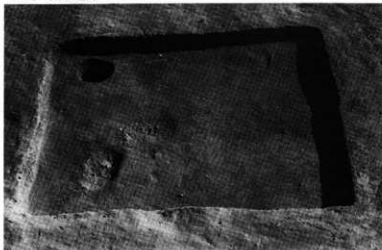
第7号住居跡
遺物出土状況



第7号住居跡
遺物出土状況



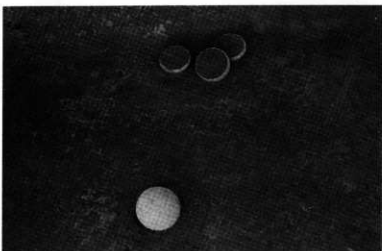
第7号住居跡
甑出土状況



第8号住居跡

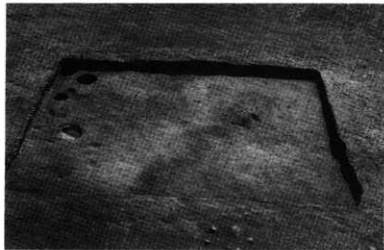


第8号住居跡
遺物出土状況



第8号住居跡
遺物出土状況

PL44 西原遺跡



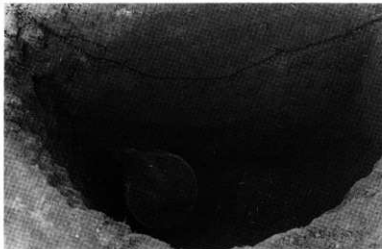
第9号住居跡



第9号住居跡
遺物出土状況



第9号住居跡
遺物出土状況



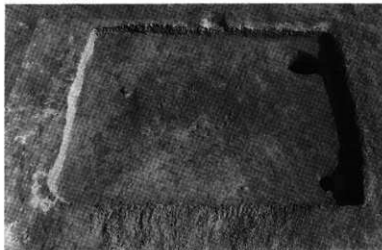
第9号住居跡
貯藏穴土層



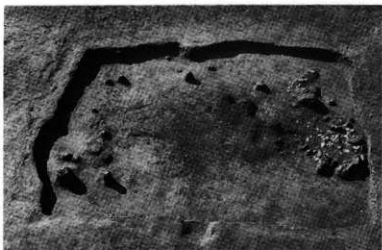
第9号住居跡
遺物出土状況



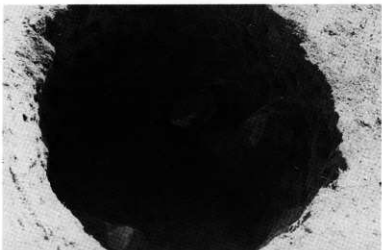
第9号住居跡
遺物出土状況



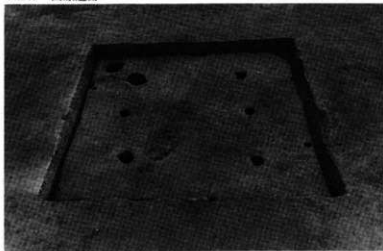
第10号住居跡



第10号住居跡
遺物出土状況



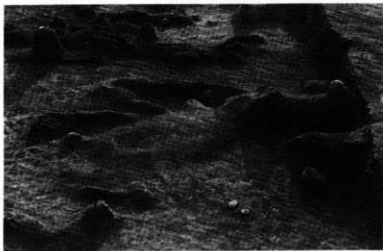
第10号住居跡
貯藏穴
遺物出土状況



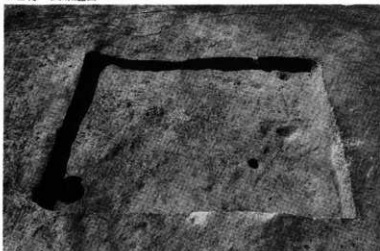
第11号住居跡



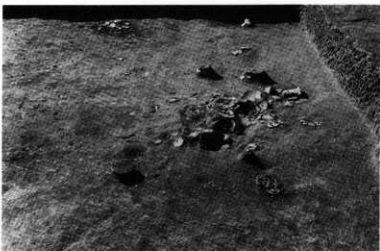
第11号住居跡
遺物出土状況



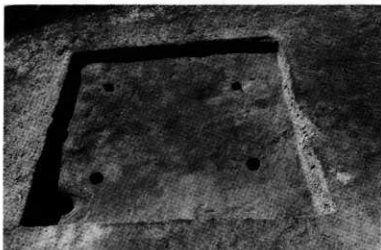
第11号住居跡
遺物出土状況



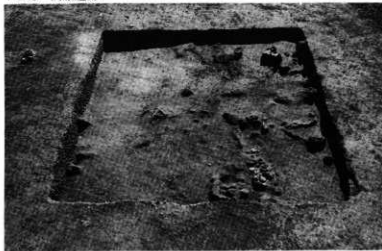
第12号住居跡



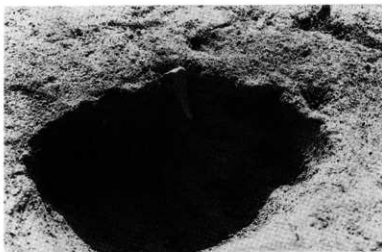
第12号住居跡
遺物出土状況



第13号住居跡



第13号住居跡
遺物出土状況

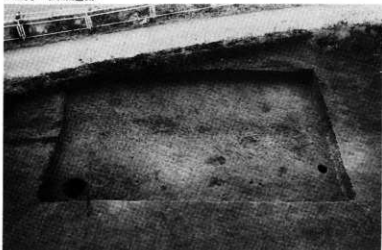


第13号住居跡
礎石出土状況



第13号住居跡
甃出土状況

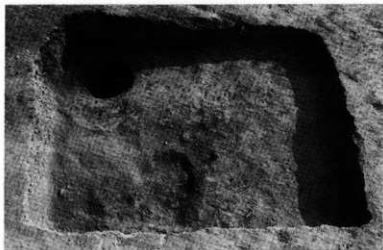
PL50 西原遺跡



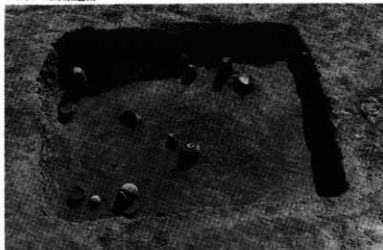
第14号住居跡



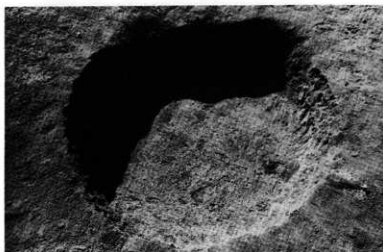
第14号住居跡
短頸壺出土状況



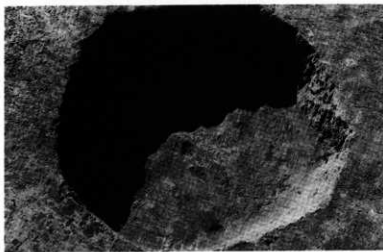
第15号住居跡



第15号住居跡
遺物出土状況



第4号土坑



第6号土坑

PL52 西原遺跡



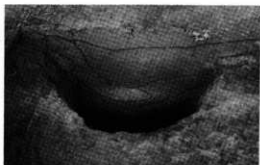
第1号炉穴



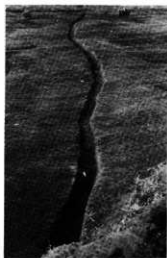
第1号炉穴 遺物出土状況



第1号土坑



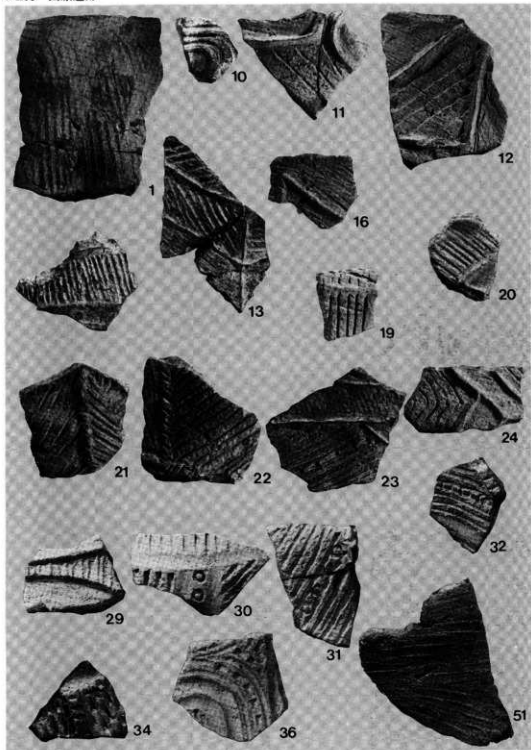
第1号井戸土層



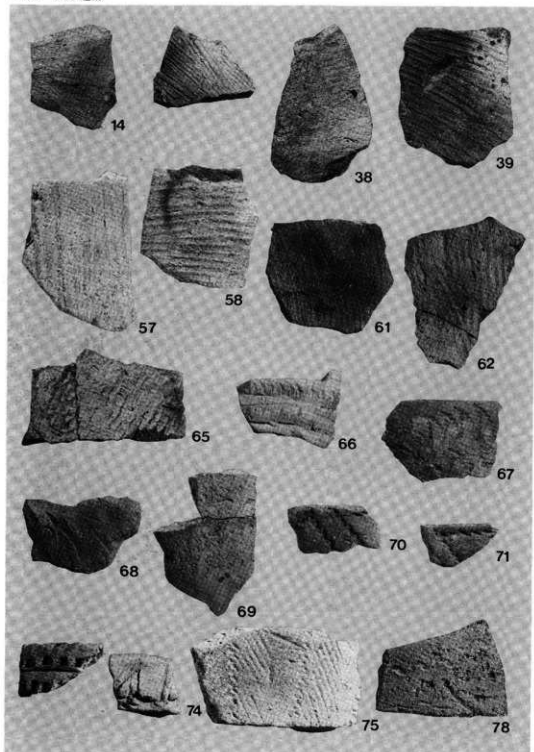
第1号溝



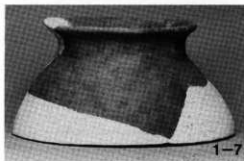
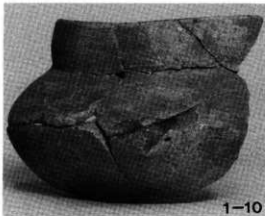
第3号溝

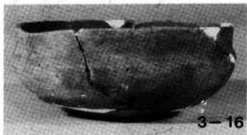
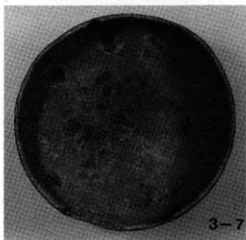
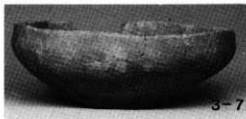


縄文時代早期土器片(1)

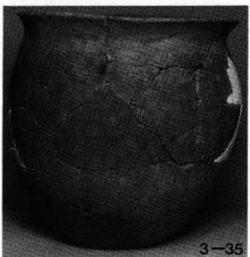


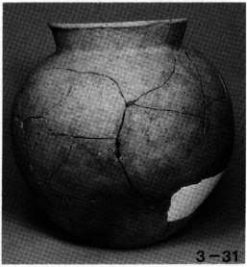
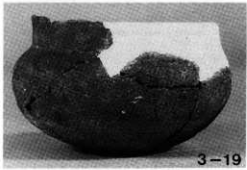
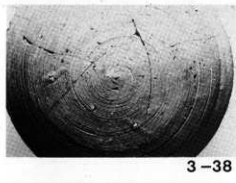
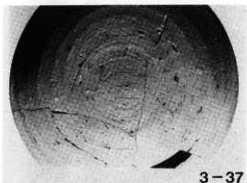
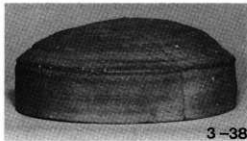
縄文時代早期・前期・中期土器片(2)

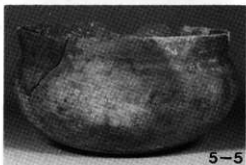
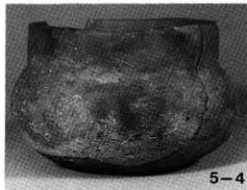


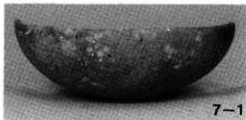


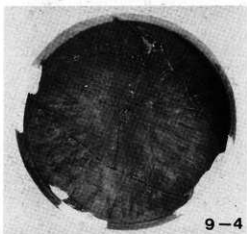
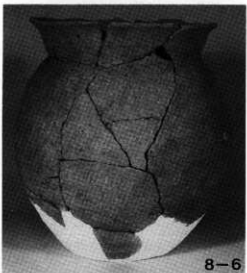
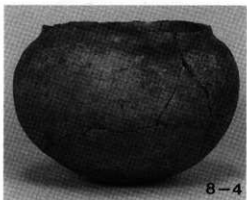
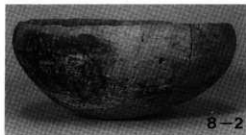


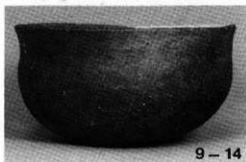
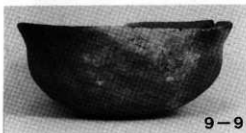




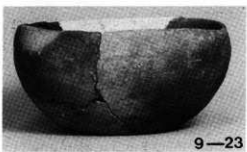
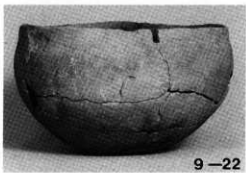
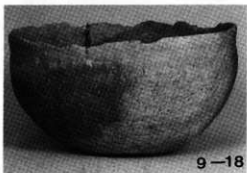




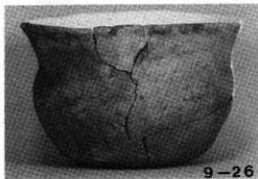
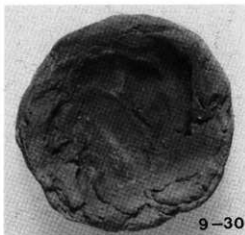
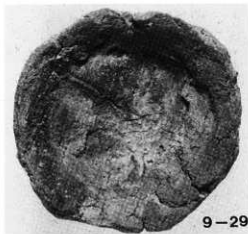




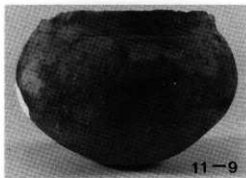
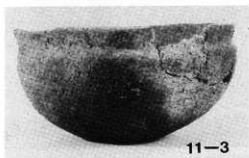
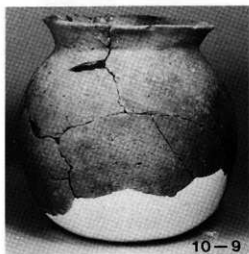
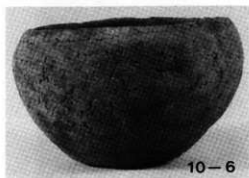
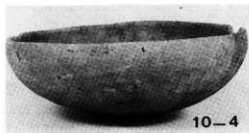
PL64 西原遺跡

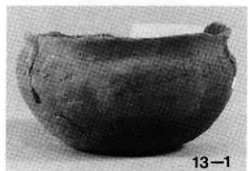
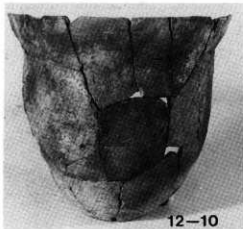


第9号住居跡出土遺物

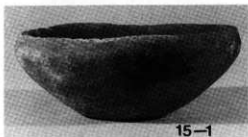
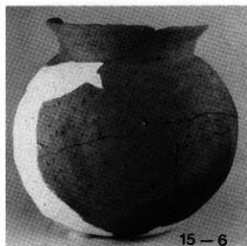
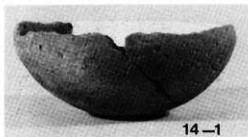


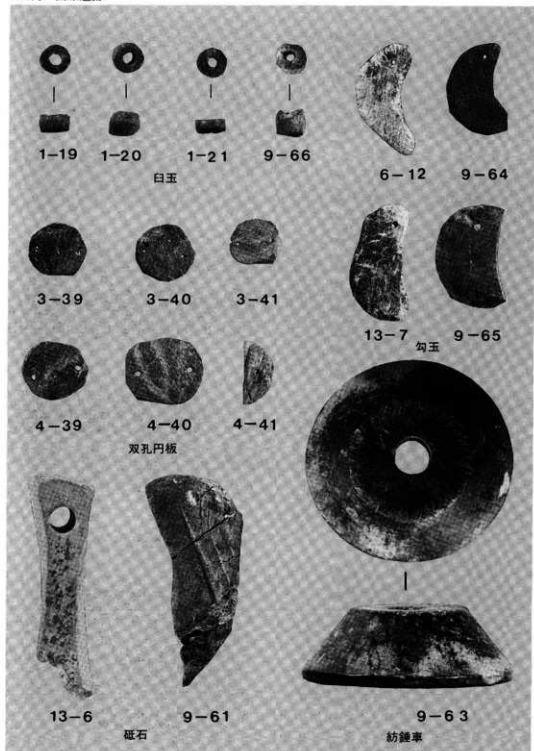






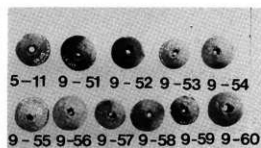
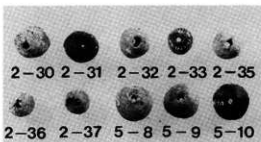
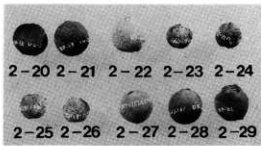
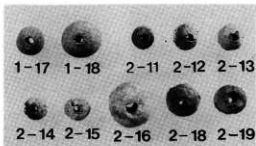
第12・13号住居跡出土遺物





石製模造品砥石

PL71 西原遺跡



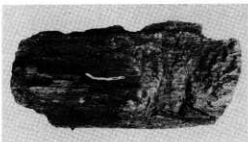
土玉



第10号住居跡出土炭化物
(ヒシの実)

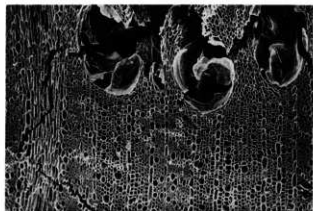


第11号住居跡出土炭化物

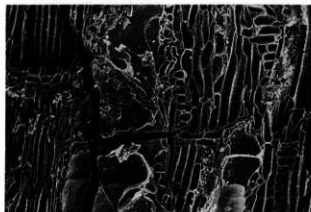


第11号住居跡出土炭化材

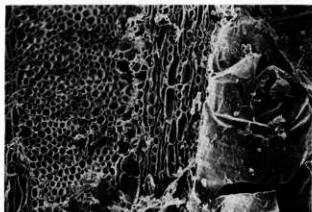




木口
x70



板目
x140



板目
x140

A



クヌギ

B



ナラまたはカシ

C



モモ

A: No. 4 *Quercus acutissima*

B: No. 5 *Quercus* sp.

C: No. 6 *Prunus persica*

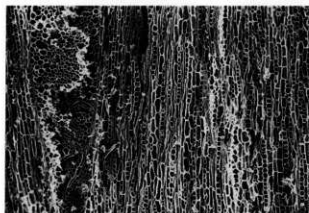
スケールは1cm



木口
x35

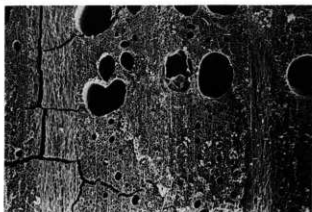


柁目
x140

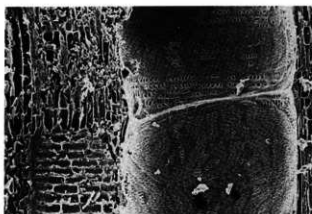


板目
x70

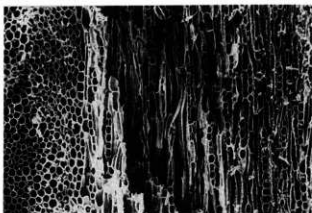
No. 1 *Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.
炭化材顕微鏡写真



木口
x35



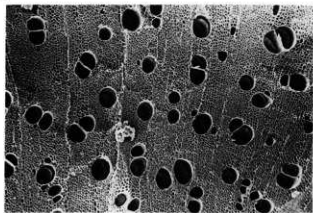
板目
x140



板目
x140

No. 2 *Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.

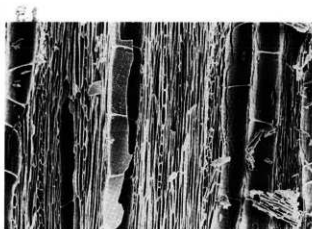
炭化材顕微鏡写真



木口
x70



砵目
x140



板目
x140

No. 3 *Rhus javanica*

炭化材顕微鏡写真

茨城県教育財団文化財調査報告第31集
水海道都市計画事業・内守谷土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2

奥山 A 遺跡
奥山 C 遺跡
西原 遺跡

昭和61年 3 月22日印刷
昭和61年 3 月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町 3 丁目 4 番57号
印刷 株式会社 きと印刷所
水戸市見川町2558 - 21